

---

# ジャンク・ジャンクション・ジャンキー

しいか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャンク・ジャンクシヨン・ジャンキー

### 【Nコード】

N4186C

### 【作者名】

しいか

### 【あらすじ】

某コンビニに務める2 歳の女店長、新野香織。いつか自分の夢のお店を開くため、今日も仕事に勤しむ。そんな香織には、家族でも恋人でもない同居人が2人いる。1人はアリス。生活能力が欠如した、少し頭の弱い、無職な家のマスコット。2人は、琢哉。売れるのか微妙なエロマンガ家でメイドさん（自称）。これはそんな3人の生活を追ったお話。そして今回は、香織のコンビニで……

## ブローグ

### ブローグ

その日、私はとつてもむしゃくしゃしていた。

どれくらいかかっていうと、特盛ネギだく汁だくに、卵を付けても足りないほどだ。

その苛立ちは顔にも雰囲気にも出ていただろう。自慢じゃないが、昔から気持ちを隠すのは不得意だ。つて、本当に自慢じゃなくて悪かったな、こんちくしょー。

最近の若者はてんでダメ。話にならない。

いや、私だつて十分……いや、多少は若い方だけど、とにかく『バカバツカ』だ。略して『バカ』だ。つて短くしたら単なるバカを1つ言ったに過ぎないじゃない。

で、このダブルバカは誰なのかというと、先週新しくバイトに雇った男子高校生だ。コンビニのバイトなんてラクシヨーなんて思っ  
ていてくれたのか、面接の時からやったらヘラヘラしてて気に食わ  
なかった、という最悪の第一印象。

じゃあ雇うなよ、つて思うかもしれない。でも雇わざるをえない理由もあったのよ。

夕方勤務のメンバーで、やっぱり高校生の小林君という子がいる。これがもう、とにかく優秀な上に顔がよくて、売り上げと私の精神  
緩和に大きく貢献していくれているのだ。

で、その小林君の友達であるというから、これは断るわけにもい  
かない。

人は見た目で判断しちゃいけない、つてことくらいは十分理解し  
ていたしね。

が、やっぱりヘラヘラはヘラヘラだった。

コンビニの店長として、私は厳しい方だと思う。とくにヘラヘラ

高校生のことは嫌いだっただから、強く当たったこともあつただろう。が、にしたつて、入つて一週間で、しかもシフトが残つてる上に、電話一本で辞めますガチャリンコ、つてバカかお前!?

いや、バカなんだ。

なにせ、紹介してくれた小林君の心苦しさとというものをまるで分かつちやいない。

プラス、勝手に辞めた分は誰かが補わないといけないのも理解しちやいまい。

でも、そんな急にできた穴を全部埋めてくれる暇人なんてのはさうおらず、結局どうなるつて、私が出るはめになるのよ。朝から夕方までだつて、けっこう疲れるつてのに、加えて夕方の勤務が入るせいで、店を出るのは夜十時過ぎ。何が悲しくて、半日もコンビニに缶詰されなきゃいけないのよ!!

しかもね、この程度で私の小林君への好感度が下がることはないけど、店員仲間にはやっぱり微妙に思うやつもいるわけよ。おかげで、今日の小林君、仕事やりづらそうに見えて仕方なかったわ。

あのヘラヘラ、いつか合法的に暴行を加えてやる。

「あー、ほんつと腹立つわ!」

思わず口に出してしまった。

目の前を歩いていたカップルが思わず私を振り返つて、謝りながら早足で消えていった。

うん、ごめん、見ず知らずのカップル。けしてあんたたちのことじゃなかったんだけど、でも暑苦しい男と、見苦しい女がいちやいちやしていたら、けっこう見る方は耐えかねるから、そういうことはホテルか自室だけでやってちょうだい。

こんなことをいうと、まるで私が男日照りで妬んでいるみたいだけど、けしてそうじゃない。

むしろ日照りどころか土砂降りで、思わず田畑が全滅しそうな勢いだ。

何言つてんだつて?

それは家に帰れば分かる。

分譲マンションの一部屋が私の家。ローンで買ったから、毎月ちまちま月収が削られてるけど、別にそれはどうってことない。家賃もローンもそう変わらないご時世だ。どうせ住むところはないと困るんだから、財産が残る方がマシってもの。

だから、それについては文句無い。

が、一つ言わせて欲しい。

「あー……おかえり。早かったな」

「おかえり、香織ちゃん」

扉を開けると、玄関の先にリビングがある。

で、そのリビングで、絡み合うまではいかないが、スカートとブラウスの下に手を入れて相手の身体をまさぐる男と、まさぐられることを嫌がってない女が一人。

人がつまらん仕事を懸命にこなして帰ってきて、玄関開けたら三秒で濡れ場。

ぶつつんいつてもいいところよね？

だけど、落ち着いて考えましょう。都会で一人暮らしで自殺していく女性が増えている昨今、二人の同居人が私を出迎えてくれたのよ？

これのなんと嬉しいことでしょう！

「なんて言うつても思ったかあ！！」

嬉しさよりも殺意が湧き上がる。殺意はへらへら高校生への怒りと合間って、超人的な行動力を生み出した。分かりやすく言うと、怒りに任せて、男にチョークスリーパーをかけた。

「なんか言うつことは！？」

「ふく、らみ、が、きもち、い、い」

「オチ口オオオオ！！」

審判がいたら間違いない私の勝ちだったろう。

だがここにいたのは審判でなく小さな女だ。

「香織ちゃん、すとつぶ」

袖をくいくい引つ張るその姿と、脳みそまでとろけてそうな口調に、思わず殺意が削げた。

ピンクと白で彩られた、全体的に緩い雰囲気を漂わせた服装が、またよく似合う。化粧もしてないのに肌白いいし、高校生つていつても通りそう。つていうか、実際補導されたことがあるそうよ。

これでいちおう成人してるつていうんだから信じられないわ。実は年齢詐称してるんじゃないかしら？ 本名が『鶴見 アリス（ツルミ アリス）』つていうのも怪しいわよね。

「たーさん、死んじゃうよ？」

「アリス、覚えておきなさい。地球上で一番生命力のある生き物はゴキブリなのよ」

「ん、覚えた」

「そう、覚えたのー、偉いわねー」

でも私が言わんとしていることは粉みじんも理解してないわね、その純粹すぎて思わずつねりたくなくなるような笑顔は。

「で、たーさんこと、谷津田<sup>ヤツダ</sup> 琢也<sup>タクヤ</sup>君？」

「なんでしようか、マジ刈る香織さん？」

「今のステキにむかつく名前はスルーするとして、いつまで床に寝っ転がってるのかしら？」

「二人の下着を目の裏に焼き付け終わるまで？」

問答無用で蹴り倒す。

下の住人に迷惑かもと思ったが、たいした抑止力にはならなかった。

「人が一生懸命仕事してるのに、このエロバカ！」

「エロマンガ家にエロバカなんていつても、ほめ言葉にしかならん！」

「誇るなああ！！！」

あー、息が上がってる。

こんなことで息切れするなんて、体育の授業のありがたみが今になって分かるわ。若者、悪いことは言わないから、体育の授業だけはちゃんと出ておきなさい。いつまでも、あると思うな、知力と体力。って何一句詠んでんのよ。

「もういい、汗臭いしお風呂入る」

「あ、一緒に入るー」

「オレモー」

「あんたは夕飯の準備」

「分かった。じゃあせめて、このビデオを風呂場にセットさせてくれ」

「セットした瞬間、あんたを墓場にセットするわよ？」

私の目から、この発言が本気であることを悟ったのだろう。

琢也は心の底から悔しがりながら、なくなくエプロンをつけて夕飯の準備に取り掛かった。っていうか、男のくせに妙にかわいいクマのアップリケがついたエプロンを着るな。むしろ自作するな。

「香織ちゃん、湧いたよー」

瞬間湯沸しって便利だ。琢也とごちゃごちゃ言ってる間に準備をしてくれたアリスのおかげで、服を脱いだらすぐにお風呂に入れる体勢になっていた。

二人で洗濯籠にシャツやら下着やらを放り込み、シャワーを浴びて湯船につかる。

「バブ入れていい？」

「何色？」

「んー……緑」

「よし、許す」

アリスは緑茶成分入りの入浴剤を湯船に入れて、ぶくぶく出てる泡を楽しそうに見つめだした。

行動も発言もよくよく子供だが、体だけは十分に女だ。っていうか、ウエストは私より細いくせに、胸は同じくらいあるのが腹立たしい。

……あれ？　つていうか、むしろ最近大きくなってきてるんじゃない？

「ね、アリス。あんた、最近ブラきつくくない？」

「え？　うん、ちよつとだけ」

そして顔を赤くする。お風呂のせいじゃないのは確かだ。

「もしかして、私が仕事の間、琢哉とお医者さんごつことか、メガネっ娘ごつことかやつてる？」

「……内緒だから言わない」

「大丈夫。私も秘密にするから」

「……ほんと？」

「うん、ほんとほんと」

それなら……と、アリスは私の耳元でごしょごしょ真実を語ってくれた。

もちろんお風呂上がったと同時に、琢哉に延髄蹴りをかましたのは言うまでもない。

アリスは、生活能力が欠如した、少し頭の弱い、無職なこの家のマスコット。

琢哉は、売れてるのか微妙なエロマンガ家で、この家のメイドさん（自称）。

私は、父親がオーナーを勤るコンビニで店長をしている、この家の稼ぎ頭。

気付いたら私の家にアリスが住み着いていた。その後暫くして、琢哉も住み着いた。

恋人でもなければ、家族でもない赤の他人三人。それが、なぜかこの家で暮らしている。

こんな私たちのお話……『ジャンク・ジャンクシヨン・ジャンキ』と銘打たれた話を始めよう。

# 1 「この店はコンビニである。名前は考えてない」

新野<sup>シンノ</sup> 香織<sup>カオリ</sup>という名前で生きてきて二十と数年。

知力の中の上くらい。運動神経もそんなくらい。

大抵のことは何でもこなすけど、何にしても一番になることはない。

顔とスタイルは……まあマシな方だ。ナンパも痴漢も経験済みだから、そう悪くない。恋人だって合計年数で10年以上はいた。

そんな私の特徴を友人どもに言わせると『変人』だそうだ。

そう言われてもしょうがない。自覚もしている。いつからこうなっていたのかは分からないけど、いつのまにかこういう自分になっていた。今の自分が私にとつての普通であり、そうでない自分というのはよく分からない。確かなのは、こんな自分や生活も嫌いじゃないということだ。

元々私は『どっちでも大丈夫な人』だった。

男でも女でも、特に関係ない。好きであれば性別に関係なく受け入れることができた。琢哉に言わせると、家庭環境や、昔から後輩の女の子にキヤーキヤー言われていたことなんか起因しているそう。

確かに小学校卒業と同時に伸びた背は、男子と比べても高かったし、目を引いただろう。性格も昔っからこんなんで、女の子らしさ、というのからは遠い位置にいた。

かといって、別に女が好きというわけではなかった。代わりに、男のことも好きではなかった。

っていうか、そういう『粹』そのものが嫌いだった。

どうして女は男を好きにならないといけないのか？

どうして女を好きになると変なのか？

私がそうしたいんだ。そうさせてくれればいいだろう。

はつきりとそう考え始めたのは、高校から大学に入るくらいだった。

たと思う。それまでにはもう男子とも女子とも付き合ったことがあった。

だが、どれも長くは続かなかった。

長くて半年。短ければ一週間。

長続きしないことに自己嫌悪を感じたこともあったけど、今は、

一人でも楽しく生きる方法を習得していた。

その1つが『仕事』である。

といっても、けしてコンビニの店長ではない。確かにそれも仕事なんだけど、これはあくまで通過点。むしろ、辞めれるなら、さくっと辞めたいくらいだ。

だけど辞めるに辞められない理由ってのがある。

それが仕事……というか、夢。

『自分のお店を開く』

おいしい紅茶やケーキを食べながら、ギャラリーを堪能し、自然とお客とお客の間に会話が生まれる。それをBGMにしながら、一点物のアクセサリーや洋服、輸入雑貨などをお土産に家に帰っていく。

カフェベースのギャラリー&ショップ。

それが私の夢だ。

だが夢を叶えるには、いろいろと現実的な問題が付きまとう。場所探し、開店資金、有能な人脈と、優秀な店員。それらを一人で確保するには、私は若すぎた。だから、父親に打診した。

『店作りしたいから、出資して』

それに対する父親の返答はというと

『店構えるにふさわしいかテストしてからな』

だった。

一流ではないが、それでも何種かに渡る店舗のオーナーを務める父親は、かわいい娘の願いを経営者の顔で無視し、試練を課してきた。

年数は気にしないから、とにかく一定以上の売り上げや、成績を見せる。

こうして首切り候補だった中年男を解雇し、その後釜として今のコンビニの店長に就任したのだ。

現在、目標設定には遠いものの、なんとか中年男の時よりも優良な経営状態を保っている。が、この程度である強欲オヤジが出資を考えるとと思えない。

自分の父親のことをこう言うのもどうかと思うけど、あれもなかなかの奇人だ。昔から、実の娘に対するものか、と思うほど徹底した教育方針を見せてくれた。

『何も無い者に存在価値なし』

シビアだった……それなりに資産もあるだろうに、娘に小遣いあげるだけでも、何かの功労が必要だった。コンクールで入賞するとか、店の手伝いをするとか……。まあおかげで、こうして店長なんてやってられるんだけどさ。

とにかくここから勝負だ。もともと立地条件からいえば、現状くらいの売り上げはあって然るべきだったのだ。今までがマイナスだったものを、プラスマイナス0にしたところからが正念場！

と、意気込んだのはいいんだけど……正直、手詰まり感が出てきた。

「ああー、やんなっちゃうわねえ」

スタッフルームにある机につつぶす。ごちゃごちゃと書類などがある机だが、私がこだわったせいで、単なる事務机にしては所々に

飾り気がある。広くてつるつとした机に頬を預けると、店内の監視カメラのモニターに目が行く。

現在、店内にいるお客の数はまばら。昼過ぎのこの時間は、だいたいいつもこんな感じだ。お昼ご飯を求めてやって来る人が、昼前から一時の間に集中してるからだ。

次に忙しくなるのは、近くの学校が終わって学生たちが帰る時間や、サラリーマンたちの帰宅時間。

お客が曜日や時間のサイクルで動いているため、コンビニ側もそれに合わせた動きになる。ピークの前に商品配置などを済ませ、開いた時間で庶務作業を終わらせる。

コンビニの仕事なんて物売ってればそれでいいと思ったら大間違いだ。商品の搬入や品並べ、販売といった基本業務はもちろんだけでなく、清掃、発注、書類作成、廃棄、配達……毎日やらないといけない仕事もけっこうあるのよ。

ならサボってないで仕事しろって？

分かってるわよ。でも、つつぷしたくもなるってものよ。

「香織さん？」

スタッフルームに入ってきた町田さんが驚きながら……っていか若干引きながらこつちを見ている。スタッフルームはレジとウォークインという巨大な冷蔵庫に繋がっているため、気を抜いていると、こんな風にだらけた姿をばっちり目撃されてしまったりする。

まあ40過ぎのパートのおばさんに気を抜いてる姿を見つけたところで、別段痛くもなんともない。かっこいいお兄さんだと少し死にたくなるけどね。残念ながら夕方の時間にならないと、うちのキレイどころはやってこない。

「どうかしたの？ 珍しく気が抜けちゃってるみたいだけど」

「それが、どうも売り上げがね」

年の功とはちよつと違うきもするけど、町田さんは私のだらけきった様子にすぐ順応したらしく、着替えを始めた。ちよつど勤務終了の時間なのだ。

「売り上げ……悪いの？」

「いや、悪くは無いの。ただ、伸び悩み始めてね」

「ならいいじゃない。前の店長の時なんて、てんでダメだったんだから」

まあ確かに、以前と比べれば良い。ただそれは、あくまで前の店長に比べればの話だ。さつきも言ったけど、現状でほぼ正常値。ここからプラスアルファを提示しないとイケない。

「販売数は伸びてる。客足も悪くない。店の雰囲気も前より良くなってる。ほんと、香織さんのおかげよ」

そう言っただけで貰えるのは嬉しいんだけど、やっぱりどこかで納得いかない自分もいる。

もやもやししながら会話をしているうちに町田さんは帰り支度を整え、勤怠処理をして出て行った。

改めて一人になった私は、紙を取り出し、思いつく限りの問題点を列挙してみた。

- 一、優秀な店員の不足。
- 二、ライバル店の登場。
- 三、品減りの多さ。

と、こんなところだろうか？

他にも細かいことは思いついたが、まあ面倒なのでよし。

この中ですぐに問題解決できそうなのは……

「ないじゃない!!」

再び机につつぷした。

優秀な店員を得るには、今働いているノーマルな店員を鍛えるしかない。バイトを募集したとしても、すぐに使えるようになるとは限らないし、っていうか例の高校生みたいな場合もあるので、あんまり新人を当てにはイケない。裏技で、他のコンビニでバイトしてる人間を引っ張ってくる、という手があるけど、日本ではあま

り引き抜きつて好かれないので、やると逆に首を絞める可能性がある。

ライバル店の登場というのは、まさかヤクザじゃあるまいし、立ち退かせるということもできない。……やろうと思えばやれるけどね。それで売り上げ伸びても、試合に勝って勝負に負けたみたいない気がするからやらないけど。

最後の品減りの多さなんだけど……。

ちなみにこの聞き慣れないかもしれない『品減り』……『シナベリ』ってのは、計算上の在庫数と、実際の在庫数との差分のことを言う。

10個仕入れて1つも売れてなければ、計算上は10個の在庫がある。なのに、実際には9個しかなければ、1個品減りしてることになる。

じゃあ、この品減りがなんで起きるのか？

店員のレジ打ちミスや、仕入れ時の間違えなどもあるにはあるが、一般的には万引きによるものだ。

最近よくテレビでやってる万引きなんだけど、実際にこの万引きが売り手に与える影響ってのはもの凄い。学生なんか遊び半分で取っていたりするけど、無い頭を働かせて考えて欲しい。どれだけ酷いことしているのかということ！

仮に、ジュース一本150円が盗まれたとしよう。原価が100円だと、収益が50円。一本売って、50円手に入るってわけ。ということは、3本売って、ようやく盗まれた1本分がチャラになる。盗まれたものいれると、4本分が無駄になったわけ。その4本を売るためには、販売スペース、光熱費、人件費、運送費……といろいろなお金がかかる。ということ、実際には4本以上売らないといけないってわけ。

毎日どんどん売れるのもあるけど、日に5本も売れない商品だって中にはあるわけだから、どんだけとんでもないか分かっただけならと思う。

「つていうか、わかれええええ!!」

「店長、お静かに」

「あ、ごめんなさい」

町田さんの代わりにレジに入ったパートのおばちゃんに怒られてしまった……。

ちなみに町田さんもこの人も、前の店長の時から働いている人で、単純にレジ操作とかなら、私より遙かに役に立つ。本人たち曰く、前の店長があまりにも使い物にならないせいで、店員のレベルが上がったから、だそうだ。

その点は以前の店長に感謝だ。おかげで、私はこうしてうだうだと経営やら収益について考えてられる。

万引き対策か……

ちなみに万引きの一番重要な点は『未然に防ぐ』こと。つまり、万引きした人を捕まえるのではなく、万引きしようと思わせないことが重要なのだ。

だから、監視カメラをわざと見えるところに置く。見られてると思えば、取れなくなる。鏡なんかも同じ役割を持っている。ただ、こういったものは置きすぎると見栄えを損ねるし、一般のお客さんが不快に思う確立も高くなってしまふ。

かといって大手パートじゃあるまいし、私服警備員がいます、というわけにもいかない。コンビニでそんなことしてる店があったら見てみたいものだ。

ちなみに他に有名な対処法としては『声をかける』というのがあ。別に「へい彼女、おちゃしな〜い?」とか頭の悪いことを言えというのではない。いらっしやいませ〜とか、何かお探ですか?とかそんなんでいい。声をかけられることで驚いて止めるやつもいるし、普通のお客さんなら、まあ親切にどうも、となったりするので一石二鳥だ。

「で、こうなると結局優秀な店員に頼る、っていう選択になってしまっわけよね」

だからその優秀な店員をどうやって集めるんだってという話だ。

どっかにコンビニの店員を育成する学校とかないものかしら？

あっても私は入らないけど。代わりに琢哉でも入れてあげるわ。そして卒業したら家賃代わりにここで働かせれば賃金もいらぬし、役には立つしで、いいこと尽くめよ。問題は、そうすると誰が家事をやるんだってことだけだ……。

アリスはムリだ。絶対にムリだ。一緒に暮らすようになってから今まで、一度たりとも満足に家事をやった試しなんかない。洗濯をすれば皿を割るし、掃除をすると逆に散らかるし、洗濯をすれば白い服がピンクになる。

最近、昼間に琢哉と特訓しているおかげで、料理は少しずつ出来るようになってきてるけど、メインはデザートだ。朝ごはんはクレープ食べて、昼ごはんはフレンチトーストで、晩御飯にケーキじゃ、そう遠くない未来に死んでしまおう。

って、なんでこんなこと考えてるんだっけ？

そつだ、優秀な店員の話だ。

時計を見ると、うだうだしている間に三時を回っていた。五時から夕方勤務の人間が来るから、私の残り仕事時間は二時間。その間に終わらせないといけない仕事はまだいくつがある。

とりあえずはそれを終わらせないといけないわね。

「さ、仕事仕事と」

二時間という時間は、長くもあり短くもある。

ぼーっとするには長すぎるが、きつちり仕事をやるうとすると短い。

それでもなんとか最低限終わらせないといけない仕事は片付けた。やるべきことはきちんと時間通りにやらないと気がすまないのだ。というよりも、残業なんてやりたくない、というのが本音だ。

やってきた夕方勤務のバイト君たちに後を任せ、昼間担当のパートさんたちに若干遅れて店を出る。

この季節、日が沈むのはかなり遅い。

まだ明るい空を見ていると、まだ昼なんじゃないかっていう気になっってくる。

最近ずつと夕方も仕事だったし……せつかく空が明るいんだし、買い物でも行くか。

携帯を取り出して、自宅にコールする。

「はい……たーさん、なんだっけ香織ちゃんち？」

「新野だよ。し、ん、の」

「えっと、新野です」

思わず笑ってしまった。

気持ちは初めて孫が電話に出てきた気分。つてそこまで年取ってないわよ。

「私よアリス」

「香織ちゃん！」

「悪いけど、ちよつと買い物してくから遅くなる、つて琢也に伝えてもらえる？ たぶん二時間くらい」

分かったー、と返事をしたアリスにお土産を買っていくことを約束して電話を切る。

コンビニを出て、普段なら左手に行く道を右に行く。なんか近くに新しい路線が通るとかで再開されたおかげで、駅が近いこつち側はお店が増えてきた。元々は売れてるのか売れてないのか中途半端な駅ビルがある程度だったんだけどね。今じゃちよつとは名前のある店が入ったり、いまましいライバルコンビニ店が増えたりと、賑やかだ。

お店が賑やかになると人通りも賑やかになる。人通りが賑やかになるとお店が賑やかになる。まあ当たり前の循環なんだけど、その循環範囲から漏れると、途端に人はいなくなり、店は寂れていくという事実もある。

つて、買い物してるときくらい、商売ことは頭からなくなって欲しいもんよね。

自分で自分に苦笑しながらウィンドウから店内を見たり、手に取

ったりしながら時間が過ぎる。買わないまでも、こうして眺めているだけで楽しい。

……言っておくけど、ケチというわけじゃないわよ。確かに友達なんかと比べると財布の紐も硬い気がするけど、本当に欲しいものはちゃんと買う。なんでもかんでもお金があるからって買わないってだけのこと。

だって、ストレス発散程度のことにはバシバシお金使って、いざって時に欲しいものが買えない方がストレス溜まるでしょ？

だもんで、私はもっぱらウインドーショッピング。

将来自分の店に置くときのレイアウト考えたり、お客さんの好みをみたり……て、結局これも仕事なのね。

どうやら私は根っから仕事人間らしい。  
社会人の鏡ね。

って、反射してどうする。鏡じゃなくて、鑑だ。

細かい間違えといっても、ちゃんとしておかないと、後で恥をかくのは自分。

というか、目の前に実物の鏡なんかがあるから、間違えちゃうのよね。

自分の姿が移った姿見の鏡の淵を軽く指で弾いて、舌を出す。ま、結局自分に帰ってくるんだけど。

「……ん？」

舌を元に戻して鏡を見ると、見慣れた姿が映っていた。私のことじゃないわよ？

鏡から目を離して自分の目でその姿を見てみると、やはりそれは見慣れた姿だった。

細いラインに、弱々しい目つきと、淵のないメガネ。男らしいという言葉からは距離があるけど、美男子は美男子だ。小さい頃は女の子とよく間違えられていたらしい彼は、勇太君。うちの店でバイトしてる小林君の下の名前が勇太という。

家は近所だといってたし、今日はバイトの日じゃないし、別に珍

しいことでもなんでもない。

でも、なんかバイト先以外のところで知ってる人に会って楽しくない？

……嫌ってる人間は別だけど。

電柱に寄りかかっている小林君のところまで静かに近寄る……脅かそうと思っただけど、そういえばこの前バイトの時、ホラー映画は苦手だと言ってたから止めておくことにした。こんなところで叫ばれでもしたら、私はお巡りさんと対談を繰り広げないといけなくなる。「はるー、小林くん」

「あ、店長」

声をかけると、小林君は慌てて姿勢を直して頭を下げた。

外見だけじゃなくて、こういう細かいけど礼儀に気を使ったりするところが好きなのよ。って、考えがおばさんくさいぞ、私。

「買い物ですか？」

「ま、覗いてるだけだけどね。小林君は？」

「ちよつと、待ち合わせを」

言いにくそうな物言いを見て、もしかしてデート？ とか勘繰ったが、残念ながら外れ。

「おー、小林」

やってきたのは、三人くらいの高校生。どうやら友達と待ち合わせをしていたらしい。

「つて、あー、店長さんもいんじゃない」

私を指差す小林君の友人A。

人のことを指差すな。あんたが弟だったら、その指へし折ってるわよ、ピノキオみたいに。

「なんだよ矢口、この人のこと知ってるの？」

「あれだよ、あれ。ほら、小林がバイトしてるとこの店長さん」

「あー、はいはい。お前が1週間くらいで辞めたコンビニんこのか」

聞き捨てならないセリフだ。

一週間くらいで辞めたコンビニのところの店長、というのが私のことを指してるのは間違いない。

そしてそこでバイトしてて辞めた、この頭の悪そうな顔は……ヘラヘラだ！

あのヘラヘラだ！！

思い出しても腹が立つ。いや、思い出さなくても腹が立つ。ここ最近で一、二を争う苛立ちの原因、ヘラヘラことバカ。

本名は矢口だったのね。記憶から顔も名前も抹消してたから思い出せなかったわ。

似合わないロングだったと思ったけど……髪切ったのも思い出せなかった要因の一つね。あれだけ注意しても切らなかつたくせに。

「おひさしぶりです。俺っすよ、矢口です、矢口」

「今思い出したわ」

「ひっでーな、香織さん」

うっぜーな、矢口くん。

お前に香織さんと気安く呼ばれる筋合いはない！！

「髪、切ったのね」

「そうなんすよ、聞いてくださいよ。こいつらつたら罰ゲームで髪切れて言うんですよ？ で、切らなかつたら学校で丸坊主だとか言い出すし、ほんとたまつたもんじゃねーすよ」

たまつたもんじゃないのは、私の方だ。

雇うときに髪切るっていうからOKしたのに、結局切らなかつた。なのに、罰ゲームだと切るのはどういう神経だ。むしろ髪よりも頭を切つて脳みそを取り替えて貰った方がよかつたと思つわよ。そしてその神経も少しはマシになるんじゃない？ 神経は脳と繋がってるものね。

「にしても、相変わらずキレイっすね」

見るな。あんたに褒められても嬉しくない。むしろ穢れる。

「小林君、彼らは友達？」

「そうっすよ、オレらみんな同じ学校なんすよ」



私のクロスチョップを受けて咳き込む琢也。

苛立ちに任せてガスガス歩いてたら、あつというまに自宅に着いちやっってたわけよ。そんで帰ってきたら、ど下手なくせに楽しげに鼻歌歌って、しかもフリフリのエプロンなんか着てるもんだから、思わずクロスチョップしちゃったわけよ。

「帰宅早々何をしてくれますか、このおせうさまは!？」

「クロスチョップ」

即答してあげたのに気に食わなかったらしく、琢也は非難の眼差しを私に向ける。

「香織ちゃん、おかえりー」

「ただいまアリスー」

ととてやって来たアリスの頭にあごを乗せ、ぐりぐりしながら嫌な気分を中和してもらおう。

天然パーマというほどではないけど、アリスの髪はゆらゆら揺れてて、なんだか楽しい。猫がいたらじゃれ付きそうだ。

「ご飯できてる？」

「うんにゃ、まだ少しかかる」

「じゃあ、アリスと散歩行って来ていい？ お土産買って来るの忘れちゃったのよ」

「オレの分のお土産は？」

「買って来てあげるわよ」

「じゃあOK、いっついで」

金払うのは私なのに、どうして偉そうな態度で言われなといけないのかしらね？

まあ今更なんで、いちいちつつこみも入れないけど。

「アリス、仕度しておいで」

「このままでいいよー」

ぼさぼさの頭と、よれよれのTシャツと、裾が汚れたロングスカート。

……まあ近所だし、いいか。

琢也の見送りの声を後に、私とアリスは近所のスーパーに向かつて歩き始めた。

このあたりで夕飯の買い物なんかをするなら、大抵の人間はこのスーパーにやって来る。駅の付近にも大きなスーパーがあるんだけど、そつちまで行くのはメンドウなんでしょうね。かくいう私もメンドウなうちの一人だ。

サンダルをひきずるようにして歩くアリスと並んで、さすがに暗くなった道を歩いて五分ほどすると到着する。

名前はスーパー『元気ですか』。入店すると『いらっしやいませ』のかわりに『元気ですかー!!』って意味不明なほどに迫力のこもった店員が出迎えてくれる。

「元気ですかー!!」

この店に入る前はね。

だが子供はこれに『元気でーす!』って答えるのが楽しいらしく、客足は減らない。今も子連れがわらわといる。たまに大人も負けじと元気デース! とか答えてるけど、そういうのを見るとどうも

……

「元気デース!」

人が感想を述べる前にアリスが嬉しそうに答えちゃったから、どう思ってるかは控えることにする。

まあともかく店は少々変わってるけど、品揃えは悪くない。

生鮮食品とかお菓子なんかの他にも、二階部分で文房具とかも売ってる。

エスカレーターに乗って二階に着くや否や、文房具コーナーに買い物籠を持って近寄るアリス。

そのままじーっと並んでる文房具を見た後、画用紙や絵の具なんかを籠に突っ込み始めた。

「最近、紙が減るの遅いみたいだけど、描いてるの?」

「描いてるよー。たーさんとお料理してるから、ちよっと減ってるけど」

アリスは画家というわけじゃないけど、絵を描いてる。

ギャラリー置きたいっていうくらいだから、私も絵は好きだ。残念ながら技術的なことは良く分からないけど、絵の持つ雰囲気というのは分かる。良いものは良い。そしてアリスの書く絵は、格段に良い。なんていうか、こう、絵の世界に引き釣りこまれる感じがする。

残念ながら本人は好きで絵を描いてるだけで、それで生活しようとかそういう頭はないらしいので、宝の持ち腐れっばいけどね。

もし私がアリスだったら、展覧会やったり、コンクールに出したりするんだけど……。

だからといって強制する気はない。描きたいように描けばいい。アリスの絵が好きだから、一緒に暮らしているわけじゃないし。

「これでいいの？」

籠に詰まった安物のクレヨンや絵の具。

もっと高いの買ってもいいのに、と言っただけど、本人はこれが好きらしい。

大きなビニール袋いっぱいに入っても二千円もしな荷物を抱えて、アリスは嬉しそうだ。

ひよっとするとビニール袋引きずるんじゃないかと心配しながら、お酒やおつまみを買って帰路に着く。

生ぬるい風を受けながら歩いて、ふと気付いた。

「琢也のお土産買い忘れてた」

いつそ買わないで帰ろうかと思っただけど、さすがにそれは可愛そうな気もする。

……しかたない。コンビニで済ませるか。

昔は気にしなかったんだけど、店で働くようになってから、あまりコンビニで買いたくない物もなくなった。原価を知っているから、つてもあるんだけど、一番の理由は他人の店の売り上げに貢献するのが嫌だからだ。

細かいっていうな。自分でもそう思うんだから。

「いらっしやせー」

やる気のない店員の声を聞きながら店に入る。

入りたくない理由に、ディスプレイや店員の態度がいちいち気になっってしまうから追加する。

客商売をする気があるのか、並べ方がなっていない、そういう細かいところが気になってしまうので、落ち着いて買い物ができないのだ。それも、同系列のコンビとなれば尚更。つつい、よその店なのに、ディスプレイを直したりしたくなってしまふ。

……さすがに、やらないけど。

とにかく、ぱっと出るのが吉ね。

ヨーグルトやプリンとか、琢也が食べそうな餌をカゴに入れて……

「ふう……」

「どうしたの香織ちゃん？ 疲れちゃった？」

「自分の性格にね」

アリスにカゴを渡して、店を出たばかりの少年の肩を叩く。少年はびくりと震えてから、こちらを見た。どうも見たことがあると思っただら、さつき小林君とどこかにいった高校生のうちの一人だ。矢口というバカではない。

が、矢口ではないが、こいつもどうやらバカのようにだ。もしかして、あのメンバーでバカじゃないのは小林君だけなんじゃないのかと思えてくる。

「なんだ、店長さんじゃないすか」

私を見てほっと胸を撫で下ろすといった具合の少年。ところで、どうしてこの手のタイプの子供って、みんな同じような喋り方するのかしらね？ もしかして、世界共通語でも作るうとか思ってるんじゃないかしら。

「覚えて貰ってるなんて光荣ね」

「そりゃキレイっすもん。覚えてますよ」

「そう。じゃあそのキレイなお姉さんのお願い聞いてもらえる？」

「え？ ええ、もちろん」

何を勘違いしたのか、バカ高校生はにやにやしなから大きく首を振る。

はたき倒したい気持ちを抑えて、少年を誘導しながら店内に戻り、レジに向かう。

「どうもー。突然だけど、滝野川店長いらっしやる？」

「あ、は、はい。ど、どうも……あ、つと、えと、店長なら奥にいますけど」

「ありがとう。ちょっとバックルームにお邪魔するって伝えて。あつちから回るから」

高校生の手を取って、店員専用の出入り口からバックルーム……事務所のことね。私の店で仕事机があったりする場所のこと。スタッフルームという場合もある。まあ名前はともかく、そこに入ると中年過ぎの店長がイスから立ち上がって、私のことを出迎えてくれた。

「お久しぶりですね、香織ちゃん」

「どうも暫くぶりです。いつも父がお世話になってます」

「いえいえ、お世話になってるのは私の方ですよ」

白髪の混じった、人のいいおじさんといった感じの滝野川さん。私のオヤジの会社の社員さんで、この店の店長を任せられている人つまり、この店は私のオヤジがオーナーを勤めているコンビニってこと。

オーナーは出資者。店長は経営者。オーナーが店長雇って、自分の代わりに店のあれこれをしてもらう。それをオーナー店という。で、私と滝野川さんは、オヤジに雇われた店長同士ということ。だから、店が同系列ってわけ。

滝野川さんと、ありきたりといえあればありきたりな挨拶を交わしてから、少年の腕を引っ張って前に突き出す。

滝野川さんは、この少年が私の恋人だとも思ってたようだ。勘違い甚だしい。だが、怯えるように黙り込む少年の姿に疑問を感じたのか、滝野川さんの顔が僅かに曇った。

「恋人ではないようですし……かといってお子さん……ではないですよね？」

「それ笑えないですから」

「そりゃそうですね」

「すみませんが、連れを待たせてるので本題に入ります。この子、万引き犯です」

滝野川さんの表情が変わる。

怒りではないが、不快そうな顔ではある。

「本当なのかね？」

「う、うそに決まってるんだろ！？」

「ポケットとバック」

私が指定したところを慌てて抑える少年。そういうことをすると余計怪しいってことを知らないのかしらね？

滝野川さんは律儀に失礼、と断りをいれてから暴れようとする少年のポケットを探り、続いてバックを開けた。人がいいから弱そうに見えるけど、これで柔道の有段者だ。ひ弱な高校生が勝てる相手じゃない。

無駄な抵抗をした少年も、結局滝野川さんの手によって万引きしたものを全部出されると、さすがにおとなしくなった。

「……言い訳はないね？」

うなだれる少年。完全に力が抜け切っている。

「すみませんね、香織ちゃん」

「いえ、たまたま見かけたもので」

「あとはこちらで対応します。どうもすみませんでした」

滝野川さんがそう言うなら、あとは私のするべきことは何もない。「分かっているとと思うけど、あなたの顔は覚えだし、黙ってても学校の名前も場所も知ってるからね」

別れ際にいちおう脅しの言葉をかけて、バックルームを出る。

店内に異変はない。万引き騒ぎで騒々しくなったら嫌だったんだけど、その心配は杞憂で終わってくれたみたいだ。ただ、アリス

が少し不安げだったのが申し訳ない。

「お待たせ」

カゴを受け取り、さっと会計を済ませて店を出る。

アルバイト君が私を見ておっかなびっくりしてたけど、そこらはあとで滝野川さんがフォロワーしてくれるだろう。甘いといえば甘い  
が、本当にいい人だ。きつとあの高校生も警察には突き出さないで  
終わるだろう。それで反省して、まともな人間になつてくれればい  
いんだけど。

「なんだったの？」

「万引きしてたのよあの子。で、目に付いちやっただから、ちょっと  
ね」

アリスが、分かったような分からないような声を出しながらコン  
ビニの方を振り返る。

「香織ちゃん偉いねえ」

「偉いとか偉くないじゃなくて、黙つてられないだけ」

「でも、わたしだったら言えないもん。おっきい人って怖いから」

アリスの顔が真剣なのがおかしくて、笑ってしまう。

「な、なんか変なこと言った？」

「アリスから見たら、大抵の人はおっきい人でしょ？」

「あ、うーん、そ、そだね……」

しょぼくれたアリスの手を取って家路を急いだ。

こういうビミョウな気分の際は、琢也をこづいて、アリスといち  
やいちやするのが一番だから。

## 2 「嫌よ嫌よは、嫌なんだってば！」

いつものように目をこすりながら日付が変わる前に布団に向かったアリスを見送りながら、リビングでお酒を飲んでた。だが、どうにも酒の進みが悪い。せつかくおつまみに輸入物の高いチーズを用意したのに、おいしいとも思わない。一人酒が嫌いなわけじゃないし、酒に弱いわけでもない。

改めて考えなくても、あの高校生のことが気になっていることは分かる。放っておいても良かったと思う。捕まえる方も捕まえられない方も、あれこれとメンドウなんだから。

でも見た以上はどうしてもほって置けない。経営者だからとか、父親の店だからとかじゃなくて、単にあーいうことが許せない。正義感が働くのとはまた違うと思うんだけど、とにかくムカツク。

「むう……」

時計を見ると、アリスが寝てから三十分ほど経っていた。このまま一人で仏頂面でお酒を飲むのも不毛だ。

「れっつごー」

チーズを切って、新しいワインとグラスを二つ持ってふすまを開ける。

「だああ!？」

慌ててチャックを閉める琢也。めったなことがない限り、私がこの部屋にやって来ることはないから、だいぶ油断していたようだ。

「あれね。思春期の息子を持った親の気分だわ。って別にその息子のことじゃないわよ？ 男の子って意味よ？」

「分かってる！ オヤジクサイ発言をかますな！」

「そんなことをしてるあんたが悪いのよ」

足でふすまを閉めて……ちなみに開けるときも足で開けたわよ。

今日はマンガの原稿をやってなかったのか、作業机として使っている折り畳みのテーブルが空いていたので、そこに皿やワインを置

いて胡坐をかく。スカートだとさすがにやばいけど、ズボンの時はこっちの方が楽。それに、女の子座りっていうの？ あれは骨盤とかに悪いそうよ。

「お飲み」

「お前はどこの女王様だ」

文句を言いながらも琢也はワインをグラスに注いで、一つを私に寄越した。

「乾杯は？」

「何に乾杯しますか、おぜうさま？」

「私の瞳に」

「見た瞬間、石にされそうだな」

私はメデューサか。

キインとグラスとグラスがぶつかり、ワインが喉を通る。飲み方が雑なのか、赤い筋がついた口元を手でぬぐうと、琢也はチーズを口に放り込む。

「で、どうした？」

「なーにが？」

「何かあつたから来たんだろう？」

琢也は作業机を引きずって私の近くに運ぶと、そのまま隣に腰を落とした。

薄くタバコの臭いがする。原稿を書く時に一本吸ってから書き始める癖があるそうで、部屋と琢也の服には、いつもうつすらとタバコの匂いが染み付いている。

嫌いな匂いじゃない。やたらに長くて覚えにくい名前をしたタバコは、なんとなく夜つばい匂いをしている。

「さつき散歩行ったじゃない？」

タバコの匂いを感じながら、ぽつぽつとさつきあつたことを話す。小学生の作文みたいにぶつ切りの言葉を聴きながら、琢也が空いたグラスにワインを注いでくれる。

全部話し終える直前にグラスを飲み干し、また注がれたワインを

グラスの中で弄びながら締めくくる。

話し終わると、自然にふうーっと長い息が漏れた。

「で、何がそんなに気になるんだ？」

「いやあさ、御節介だったかなーって」

「そういう性格なんだから、しょうがないんじゃないか？」

「そこはフォローするところでしょう」

ガスつとわき腹を小突くと、琢也は苦笑しながら私にチーズを啜えさせた。

「じゃあ見てみぬふりする性格に変われそうか？」

手を使わずにチーズを食べながら考える。

「無理」

「ほらな」

全部食べ終えた私の口に再びチーズが装填される。

「悩みを履き違えんなよ。お前が気にしてるのは、アリスを不安にさせたーってことで、別にその高校生が警察にとかつてのは気にしてないだろ？」

「……はもひれない」

チーズ啜えてるから上手く喋れない。ちなみに今は「かもしれない」と答えた。

「高校生のことが気になるなら、お前の性格云々を悩む必要もあるかもしれないけど、アリスのことなら答えは簡単。はい、どうしますか香織さん？」

「……なかつたことにする」

チヨップを食らった。

「謝る」

「正解」

チヨップされたところを撫でられた。

「ま、アリスは気にしてないって言うだろうけどな」

「私もそう思う」

「でもお前が謝りたいなら謝ってすっきりすれば？　それでもまだ

足りないなら、ケーキでも買ってやれば忘れられると思うぞ、アリスだし」

「そうね、アリスだものね」

「うん、アリスだから」

「ごめんアリス、でもそこに関しては琢也と同意見だ。」

「で、琢也君のお悩み相談室はおしまいでいいのかな?」

「うむ、許す」

「なんで相談した方が偉そうなんだ?」

「私が家主だから。チーズもワインも私が買ったの。どうーゆーあんだーすたーんど?」

「それを言われるとなんとも反論できないな」

苦笑する琢也。

「で、やっぱりこれも家主様には逆らえないわけだな?」

男物のシャツのボタンを外す私の手を指差す琢也。

私は耳元に口を寄せてその質問に返答する。

「これに関しては、自分の右手の方が好きなら辞退してもいいわよ?」

琢也は私の耳元に口を寄せて返事を寄越した。

「朝までお供しましょう、お嬢様」

それに対して私はマジメに答えた。

「それは無理。一回やったら寝る。あんたと違って私は明日も仕事なの」

「ムードを考えろ!」

「昔からよく言われるわー。女のくせにムードを考えなさすぎて」

「そこは性格改善しようぜ」

「いいから、やるのかやらないのかはつきりする!」

「やる!」

「よし!」

いつのまにか体育会系になっていた。

まあ、私は気にしない。

とにかく気分も楽になったし、身体も動かしたしお酒も飲んだしで、その日はぐっすりと眠ることができた。

「……今何時？」

「見るな。見ると後悔するぞ」

「時間分かってたなら、起こしなさいよ!」

「努力はした」

ぐっすり寝すぎて遅刻寸前になるというオチがついたけど……。でも、その日一番話題になるべきことは、そんなことでなく、もっと別にあつた。

夕方、昼間担当のバイトと入れ替わるようにやってきたバイト君たちの一人に小林君がいた。

その小林君の細い顔に、あざが出来ていた。それもちよつとやさつとじゃない、かなり大きくて色の悪いあざだ。

「どうしたの、それ？」

「ついさつき、自転車に乗ってたら、スリップして電柱にぶつかっちゃって」

恥ずかしそうに語る小林君。でも口を動かしただけで痛むのか、顔をしかめる。

さすがにこの状況でバイトをやらせるのは可哀想な気がする。

「今日は休みでいいわよ」

なるべく小林君が気を使わないように勤める。が、元々気遣い屋の小林君にはどんな言い方も通用せず、あたふたとさせてしまった。

「いえ、大丈夫です」

「お客さんも心配しちゃうでしょ？」

「あの、なら、裏の仕事とか中心で」

マジメなものいいけど、大人がこう言ってるんだから、甘えればいいのに……

「百合ちゃん、大庭君、二人ともいいわよね？」

残り二人のバイトメンバーは快くそれを承諾してくれた。二人ともそんなに目立つ人間ではないけれど、基本的にいい子で助かる。

「でも、二人じゃ……」

「私が入るから大丈夫よ」

「そんなわけには」

尚も食い下がろうとする小林君を、知らず知らずのうちに睨みつける私。慌てて表情を改めたけど、どうやら逆にそれがよかったらしい。これ以上言っても、私の機嫌を損ねるだけだと察したのか、小林君は深く頭を下げると、何度も謝りながら、店を出て行った。  
「さ、がんばりましょうか」

正直面倒ではあるけど、小林君のためなら仕方ない。それに、こういう機会でもないと、夕方メンバーの仕事の良し悪しも見れないしね。

物事は何事も、なるべくプラスに取るべきよ。

……そう思つてできないことなんて、ざらなわけだけど。

そしてやっぱり、私はポジティブに生き切ることができない人間のようなのだ。

「いらっしやいま……」

思わず言葉が途切れる。

「うーっす、店長さん」

現れたのは、矢口。相変わらずヘラヘラしてる。しかも周りに気を使うということを知らないのか、異様に声がでかい。

「小林いないっすか？」

「小林君なら帰ったわよ」

「え、どうしてっすか？」

「いらっしやいませー、お会計710円です。はい、ありがとうございます」  
ざいました

「ねえ、どうしてっすか？」

「怪我したからよ」

手短かに用件にだけ答えて、次の接客を始める。

「んだよ、使えねーな、小林……あぁー、マジ困ったあ」  
マジだよ。そして困ってるのはこっちだよ。いいから帰れ。そして二度と来るな。

見て分かるでしょ、今こっちはレジ対応してるのよ。余計なこと喋ってる暇も、喋りかけられてる暇もないの！

私は目だけで大庭君を呼ぶと、レジの対応を代わってもらって、バックルームに引っ込んだ。グツジョブ大庭君。もしあそこで大庭君が気づいてくれなかったら、私はカウンターにいなながら、かなり凄い形相をしたかもしれない。

「香織さん、あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、百合ちゃん。ありがとう」

百合ちゃんも品出しの手を休めて、私のことを心配してくれた。

そして、彼は帰りましたから、と一言添えて、仕事に戻って行った。

……最悪だ。何をやってるんだ私は？

自分よりも年下の人間に気を使わせて、自分の気持ちもコントロールできないで、バカみたいじゃない。

店の売上げが伸びない4番目の理由に、店長がふがないから、も追加だ。

「……ムカツク」

その言葉は、何よりも自分に向かう。そしてその言葉に負けないように表情を改める。深夜のバイトが来るまで……仕事終わりまで残り3時間。夕方の仕事……お菓子の搬入と、ディスプレイなんかでいえば、私よりも大庭君たちの方がはるかに出来る。だから、私の仕事は接客。つまり、レジ。一番お客さんと接する係りだ。そのレジ係がふてくされた顔のまま仕事をするわけにはいかない。

不貞腐れた顔は、ずさんな対応は、クレームに繋がる。店に不満を抱えた客は他の店に行く。ここが渋谷や新宿、駅前といった、客がばか見たいに多い店ならまだいい。だけど、うちみたいに住宅地にあつて、近隣住民のリピーターが主な客層の店では、そのたった1人が100人に匹敵する重みを持つ。

人の噂は火の如く早い。そして人は、事実よりも顔見知りの言葉の方を真実と見る。

それが何に繋がるか……1人の不満は噂として広がり、10人を店から遠ざける。その10人は更に10人を遠ざける。

そして売り上げが落ちる。

売り上げが落ちることは、私の夢が遠ざかることを意味する。

そんなことは許されない。私が私を許せない。

……あんなガキのせいで、夢が遠のいてたまるか。

無理矢理笑顔を作ってレジに立つ。たかがコンビニの、つまらないレジの仕事だと思われてても、絶対に手を抜いてなんてやるもんか。

ヘラヘラも、バカも、アホも、男も女も、じじいもばばいも、おばさんもおっさんも、ガキも、それ以外も！

レジなんて、楽でいいわね。主婦なんて大変なのよ。

そんな仕事やめて、オレの彼女になりなよ。

コンビニでいいよねー、私なんて毎日嫌な上司にお茶頼まれるし。

たかがコンビニの店員がなめてんじゃねーぞ？

なんともいいなさい。

お客として私の目の前に立つ以上は、笑顔で迎えてあげる。

あんたたちが気持ちよく買い物できるようにしてあげる。

それが私の夢に近づくことだから。

それ以外に、私ができることなんてないんだから。

そう思いながら、ほとんど毎日コンビニに向かう。

新しいバイトもそのうち決まる。

矢口も来なくなる。

小林君の怪我也治る。

そうすれば今までどおりだ。私は今までどおりあれこれ悩みながら、自分にできることを一つづつこなして、結果を残していけばいい。

なのに……

なのに、なのに、なのに！

「なんだっていうのよ!？」

喚きながらテーブルを叩いた。じーんと、自分の手の方が痛くなるくらいに強く。

「こらこら、テーブルが可哀想だぞ」

「可哀想なのは、私の方よ!」

アリスが驚きながら、イスに座ってアイスココアを飲んでいる。クリームを浮かべたココアは、かなり甘ったるそう、胸焼けしそうなほどだった。

「あれから毎日のように来るのよ、あのバカ!」

「えと、湯口くんだけ?」

アリスの間違いを訂正しながら、ブラックのアイスコーヒーを一気に飲み干す。琢也にお代わりを頼むと、胃に悪いから、とカフェオレにされた。

「しかも、小林君もなんか怪我増えて休みがちだし」

暑さのせい、小林君もなんか怪我が増えて休みがちだし、と小林君は語る。まあ、見るからに体は弱そうだし、この暑さはきついだろう。かと思つと、店内の冷房が辛いと長袖を着てくる。そんな小林君だから、休むのは仕方ない。ただ、それが重なる、さすがに私の好感度も減少気味だ。

休んだ代わりに出るのは、主に私。夕方メンバーががんばって埋めようとしてくれてはいるが、高校生、大学生が多いせいで、どうしても穴はできる。それは、店長の私が埋めるしかない。

「で、頑張ってる香織のところ矢口がやってきて、話しかけてくる、と」

「暇なのかなあ？ その男の子」

「好きなんですよ、年上のキレイなお姉さまが」

「冗談じゃないわよ、と琢也を睨んでから、カフェオレを飲む。まじくはないけど、そのマイルドさがなんだか奇妙だ。その奇妙さは苛立ちを増幅させ、ここ最近の嫌な光景を次々に掘り起こしてくれる。

増える労働時間。毎日のようにやってくるバカ。その二つに堪えながら、懸命にレジに向かう時間。しかも悩みの種である品減りは解消されない。しかも、もう完全に店員のミスなんかじゃなくて、明らかに万引きされていると分かるほどの被害額が出ている。なのに、どんだけ監視カメラの画像をチェックしても、犯人らしきものが出てこない。

あー、ほんとヤダ。ほんとムカつく。

そのムカツキに合わせて、どんどんと喋る。喋ればすつきりするかっていうとそうでもなく、逆に生々しく気持ち呼び起こして、不愉快さが増していく。その不快さは逆に言葉の生産スピードを上げる。それは一から十まで、話したことがあるものからないもので、とにかく思いつく限り片っ端からだらだらと垂れ流しになっ出て行く。

「バカもバカだけど、小林君もさ……足とか背中とか、この前は腹痛だった。とにかく、そんな次々怪我しなくてもいいじゃない。もうちょっと普段から気をつければ、そんなに」

「香織、ちよっと待った」

「なによ？」

今まで人の話をろくに聞かずにボールで卵を溶いていた琢也が、

その手を止めてこつちを見る。しかも、普通の気の抜け切っただらしのない顔じゃなくて、少しだけドキリットしまってる。

「小林君の怪我って、最初の顔以外は、ほとんど服で見えない場所に集中してないか？」

「だからなんなのよ、と思いつつも、振り返る。」

「……確かにそう言われれば、そうかも」

琢也が、ボールを脇において顔をしかめる。

その表情を見た私も、足元から寒気が昇ってくるのを感じた。

もしかしたら私は、自分の苛立ちに気を取られすぎて、大事なことを見逃していたかもしれない。

元から線が細いから寒がりだとはいえ、夏のこの時期に長袖を着て外を歩くのもおかしいといえば、おかしい。そもそも、店にはちゃんと長袖のユニフォームがある。寒いならそれを着ればいいし、店に来てから長袖に着替えたっていいはずだ。なのに、小林君はまるで地肌を隠すように、常に長袖を着ている。

「……もしかして私」

「見落としてたのかもな」

いや……かも、じゃない。確実に、見落としていた。

分かる。見えてきた。流れが見えて来た。

なんでこんな、簡単に分かるような流れを見落としてたんだろう……。

普段の私なら、いくらイライラしやすいとはいえ、見抜けていたはずな

「もしかして、私がこうなることも考えてた？」

「かも、な」

あのバカが？

それはない……いや……ありえるかもしれない。ずっとバカだバカだと思ってたけど、小林君と同じ学校ということは、勉強の出来はそう悪くないはずだ。なら、頭の回転の速さだけなら、中の上の私より勝つことは十分考えられる。

「……知り合いに、隠しカメラ持ってるやつがいる」

「……借りれる？」

「早いうちに用意する」

アリスに、何に使うの？ と聞かれたが、私は何も答える気にならなかった。

### 3 「踊るアホウに、見るアホウ。同じアホなら、変わりやーしません」

ある日の夕方、私はまたレジに立っていた。

小林君は休み。その休みの連絡を受けた百合ちゃんが、代わります、と言ってくれたのに甘えることにした。だが、百合ちゃんをシフトに加えた上で、私もメンバーに加わった。これで、今日店には4人の店員がいることになる。

本来なら三人の時間帯であるはずなのに……と、怪訝そうな顔をする夕方メンバーに、ちよつとやることがあるから、と断りを入れて、先に仕事の指示を出した。

百合ちゃんに、2台あるレジのうちの1つを。大庭君にバックルームの仕事をやってもらって、あともう一人がディスプレイなどをやってもらう。

私は、さつき言ったようにレジ。

いつもと同じように接客しながら、来るのを待つ。

一時間、二時間と過ぎて、お客が込みだしたところに……来た。

矢口だ。矢口はいつもと同じように、私に意味のない会話を親しげにふってくる。

「あれ、今日も小林は休みっすか？」

「そうよ」

「だらしないっすよね」

「そうね」

普段と同じやり取り。向こうもそう思っているだろう。ただ、今日は違うのよ。

「んじゃ、おつかれさまっす」

「はい、おつかれさま」

矢口が店を出る。数人の客も出て行く。その時、密かにバックルームで隠しカメラの映像をチェックしていた琢也が表に出て来て、合図を送って来た。それから少し遅れて、大庭君もバックルームか

ら出て来て、お願いしてあったとおり、私の代わりにレジに入る。私はその場でユニフォームを脱ぎ、店から出て、矢口の腕を掴んだ。

「な、なんつすか？」

「話があるの」

「すみません、これから用事が」

「こつちも用事があるのよ！」

怒りのこもった声に矢口だけでなく、通行人たちも驚く。

その中から、琢也が三人の男女の肩を叩いた。

「君たちもだ。間違っても逃げようなんて思うなよ？」

スーツを着た琢也のドスの聞いた声に、三人はガチガチに固まる。そして、私たちは矢口+三人を連れて、バックルームに入る。その異様な光景に何事かと思う客もいただろうけど、今はそれどころじゃない。

バックルームに入ると、三人はビクビクと震えながら、唯一矢口だけは不遜な態度で私たちの前に立った。

「……取ったもの、出さない」

「な……なんのことですか？ 私たちなんにも」

女の子が答える。私は思いつきり壁を叩いて、言葉の続きを黙らせた。

「大人を舐めてんじゃないわよ？」

あんたみたいにふらふらしてる小娘に舐められるほど軽い人生は送ってない。

「10数える間に自分で出さない。出さなかったら、問答無用で警察を呼ぶからね」

そして数を数え始める。5秒までは必死に抗う三人。だが、数が0に近寄ると慌てたそぶりを見せる。が、それを遮ったのは矢口。

「証拠はあるんつすか？」

「今から身体検査してあげましょうか？」

「セクハラで訴えますよ？ 若い子に触りたかった大人って言われ

たら、店の信用ガタ落ちつすよね？」

いい度胸だ、このくそガキ。

3。

「ね、ねえ矢口！」

2。

「気にするな。やってないことで訴えられることなんかねーよ」

1。

「だ、ただだよ!？」

……0。

「琢也、電話して」

「リヨウカイ」

琢也が受話器を手に取り、番号を押す。ぴったり3ケタ。

「あー、すみませんが」

「待って！」

女の子が動いた。

「ごめんなさい、だって、あの、その！」

「出さない」

琢也が通話口を押さえている間に、女の子はポケットやバックから、ばらばらと文房具などを取り出した。それに従うように、二人の少年たちも、ヘアスプレーやお菓子などを出し始める。

「……何か言うことは？」

三人の少年少女は、素直に詫びの言葉を入れた。

多少、不承不承なところはあるが、とりあえずはマシだ。もちろんこのあと家には連絡するし、それなりの罰は受けてもらうが、せめて警察沙汰にするのは回避してあげる。

「矢口は、何かいうことは？」

「……別にオレは何も取ってないっすよ？ 無理矢理つれてこられ

ただけっすもん」

「警察に話していいのね？」

「したければすれば？ 逆にそっちがフリになるだけじゃねーの？」

そういう態度で来るならば、こっちにも考えがある。

「琢也、今何時？」

「えーと……八時ちょうどをお伝えします」

電話の向こうから聞こえてくる時報通りに、時間を教えてくれる琢也。その瞬間、矢口の顔が、は？ と歪んだ。

「素直に謝った三人は、警察だけは勘弁してあげる」

「警察……言っていない？」

「電話してないわよ。今のは時報。110じゃないわ」

それを聞いた瞬間、女の子は泣き崩れた。ぺたんと床に座り込み、静かに泣き始める。

「あんたらがしてたこと分かった？」

静かに怒りを込めながら問う。

「あんたたちがしてた『こんな軽いこと』が、あんたたちの全てを否定すんのよ。将来も、今も、友達も、信用も、たった一回ばれただけで、全部粉々になんの」

女の子が、びくつと震えた。

「可愛い彼女が欲しいでしょ？ できればいい大学、いい会社に入つて、可愛いお嫁さんと、子供が欲しいでしょ？」

一人の少年が震えた。

「夢とかもあんでしょ？ クリエイター？ ミュージシャン？ 企業の社長？ その夢に、終始付きまとうのよ『こんなこと』がね」  
もう一人の少年も震えた。

「警察に電話されたと思つてそんなに怯えるくらいなら、こんなバカなことすんじゃないわよ！！」

机を叩く。

自分のためというよりも、このバカどものために。

自分のやつてることも分からなかった、でもまだ救いようはあるバカたちのために。

「ルールがどうか、法律とか、モラルなんてどうでもいいのよ！  
自分のやったことは、全部自分に返つてくんの！ それが、自分

の大事なもん全部ぶっ壊すのよ!？」

女の子が、ごめんなさいを繰り返す。それにつられたのか、二人の少年もぐずぐずと泣き始めた。

「バカじゃないの。若いですまないことだってあんのよ？　こんなくだらないことで、ダメにしてどーすんのよ!」

琢也がすつと差し出した缶コーヒを一口飲んで気を落ち着ける。大丈夫、分かっているわよ。そんな顔しなくても、ちゃんとやるべきことは分かっているわよ。

琢也に目だけでそれを伝えて、私は視線を動かす。まだ、不遜な顔で立つてる矢口に向かって。

「あんたが計画犯でしょ？」

「知らねー」

「じゃあ、こつちの3人に聞いわ。教えて、誰が計画したの？」

もちろん、答えはすぐはない。

「答えて貰えないと帰せないわよ？」

まだ黙ったまま。

「答えられないなら、プロを呼ぶしかないんだけど、いいの？」

3人がこれに屈した。3人は、それぞれに顔を見合わせると、小さく口を開いた。

「……やぐ……が」

「もうちよつと大きな声で」

「やぐ、ちが、やれって」

「おい、てめえ!」

女の子に掴みかかろうとした矢口を、琢也が止める。

「女の子に優しくできない男は屑だぞ」

「うるせー!　放せ、じじい!」

矢口が琢也を殴る。みごとに入ったパンチ。だけど、矢口は分かっている。その男は、わざと殴られたんだということに。

調子に乗ってもう一発殴ろうとした矢口の腕を琢也が捻る。警察や軍人のような鮮やかさで腕を捻られた矢口は、それ以上動けなく

なつて、小さなうめき声を上げた。

「3人、オレが殴られたの見てたな？」

「は、はい」

「正当防衛だよな？」

「そ、そうです」

それを聞いて、しまった、と明らかに顔に出す矢口。満足げに笑う琢也。こんな性格の悪い同居人がいることを知らなかったのが、こいつの最大の誤算だ。

「教えてもらえる？　なんていわれて、万引きしようと思ったの？」

「ここまでになったら、3人の口を止める要素は何もない。」

3人は、つかえつつかえながらも、それを教えてくれた。

まず、矢口はこの店の監視カメラの位置を覚えるためにバイトとして入った。ダミーや、お客さんには見えない所に置いてるカメラもあるからだ。そして正確なカメラの位置と、カメラの死角を覚えた。更に、一番店が込む時間なども把握し、バイトを辞めた。そしてそれを仲間に教えて、万引きをさせる。自分は直接万引きしない代わりに、一番注意力のありそうな人間に話しかけたりして、注意をそらせる。私はその作戦に、まんまとはめられていたのだ。

「そんなの全部、そいつらの作り話だ！」

腕をひねり、矢口の発言を阻止する琢也。

「……もう一つ聞きたいんだけど、小林君に怪我させたのは、矢口とつるんでたやつ？」

「……そうです」

女の子が答えた。

「やっぱりね」

深い溜息をついた私に、女の子は泣きながら説明してくれた。

矢口は、小林君がバイトしていることを知ると、無理矢理……脅したりして、友達としてバイトの面接を受けさせるように迫った。そして辞めた後も、ちょこちょこカツアゲ気味に小遣いを巻き上げたりしていたそうだ。

小林君の傷は、私が矢口の仲間を万引きとして滝野川さんに突出した翌日以降、私への怒りを発散させる代わりに、殴られたりして出来たものらしい。小林君は、それを言ったら私が責任を感じると思っただけでなかったのだろう。いや、そもそもこいつらを紹介してしまえば、万引きの手引きをさせたということに、苦しさを感じていただろう。更に、怪我までさせられたのに、お金を取られるからバイトして稼がないとならなかった。だから、長袖を着てまでバイトに来ようとしていた。来れない日は、よっぽど怪我がひどかったんだらう。

「それ、知ってた、から、怖くて、辞め、れ、なく、て」  
途切れ途切れに語った女の子は、また泣き出してしまった。

男の子が一人、それを慰めるようにしゃがみこんだが、彼もまた泣いているせいで、喋れなかった。

「救いようのないオオバカね」

「……なら警察にでも言えばいいだろう？」

矢口がガンをつけてくる。

「いえよ。ほら、さっさと見えよ。代わりに、噂をばら撒いてやるからな。お前ら全員殴りにいってやるからな！」

心得てる。バカだけど、頭の回転は速い。

相手の嫌なこと、怖がることをちゃんと分かっている。

むかつくけど、それは認めてあげるわ。

だけどね……甘いのよ。

あんたは出来がいい。だけど、最悪な人間。だから、私も最悪な部分で対抗してあげる。

「琢也、今の会話編集したら、ネットにはらまいて」

矢口の顔が青ざめる。さすが若いだけあって、ネットの世界の恐ろしさは十分理解している。

「今の会話は、全部録音したわ」

全ての敵意を込めて睨みつけてやる。

「警察？ そんな甘いもんで済むと思ってるの？」

矢口が震え始めた。

「この子たちはまだ情状酌量の余地があるとしても、あなたは別よ。あなたの未来、全部ぶち壊してやる」

ゆっくりと、矢口から自信が無くなっていく。

「名前と、顔と、住所と、電話と、学校も、出席番号も、あなたを特定できるすべての情報を音声と一緒にさらけ出してあげる」

編集された音声は、単なるネタとして捉える人間の方が多いだろ。う。だけど、確実にいる。面白半分の悪意や、絶対なる正義感を持つて、このバカの心身に攻撃をしかけようとする人間が。

「最初に、あなたの学校にこれを送ってあげる。せつかくいい学校に入れたのに、これで人生半分おしまいね。で、あなたが転校したら、その学校に送ってやる。大学に入ったら、大学に送ってやる。」

就職したら、会社に送ってやる。ついでだから、家族の職場にも送ってやる」

それがどんなことか……協調や外聞を気にする日本でそんなことされることが、どれだけ苦痛か分からないタイプのバカじゃないわよね、あなたは。

気にするでしょ？

だから自分じゃやらなかった。ばれた時を想定して、後ろ指を向けられて生きたくないから。

理解できるでしょ？

他人の心理状況を。だから、あなたは私が苛立ってるのを見て、ヘラヘラと楽しんでいた。

だけどね、青いのよ。

大人のことなめてんじやないわよ？

全ての大人が、社会が、あなたの頭の範囲内でどうこうなると思ったら大間違いなのよ。

あなたよりも頭のいい、あなたよりも行動力のある、あなたよりもズルくて、あなたよりも最悪な人間はいくらでもいるのよ。

「これからたつぷりと、死ぬまで社会の厚みを感じながら生きなさ

い

「じよ、冗談だろ？」

「あんたは冗談で万引きしたの？」

言葉を亡くす矢口。

心なしか、その顔が青ざめてる。

いい気味だ。

どうせなら、もっととことんいじめてやりたい。

だけど、泣いたままの3人もいる。この子達に、これ以上この黒い話を聞かせるのは、少々忍びない。

……こころが潮時ね。

「誓いなさい」

矢口が顔を上げる。

「もう二度と、万引きも暴行も、あらゆる不正をしないこと。うちの店に関する悪口を書いたり、言いふらしたりしないこと」

「ち、誓ったら許してくれるのか？」

「許しはしないわ。でも、ばら撒くのだけは止めてあげる」

「ち、誓う！」

「いい？ ほんの少しでもあんたが暴行したとか、万引きしたとか、うちの悪口を言ったって聞いたら、すぐにばらまくわよ」

頷く矢口。

「他の仲間がやっても、よ」

「そ、そんなんオレに関係ないだろ！？」

「は？ あんたリーダーでしょ？ それくらい何とかしなさいよ。

それとも、今すぐばら撒かれないの？」

再び押し黙る矢口。

完全に自信は失っている。偉そうな態度もない。切り返すだけの頭の回転もない。

もう、これでいいだろう。

「約束、できるわね？」

「……わかった」

「言葉遣いを知らないの？」

「……わかりました」

うな垂れた矢口の姿を見て、琢也もその手を離した。その後のことは良く覚えていない。

というか、覚えていたくもなかった。

警察に連絡しない代わりに家に電話したら、逆に文句を言うてくる親もいたりで、ほんとさんざんだった。それでもなんとかその日のうちに騒ぎを収め、私は小林君に電話をした。小林君に全ての事情を話すと、電話の向こうで泣きながら、ごめんなさいとありがとうを言われた。それが心苦しくて、私は早めに電話を切った。

そうこうしてるところに、時間は日付を回っていた。

長い一日だった。

「おかえり香織ちゃん、あのね、えっと」

「ごめん、アリス。また明日ね」

アリスに申し訳ないと思いつつも、私はほとんど着替えることもなく、眠りについた。

事件は解決したのに、気持ちはいっこうに晴れなかった。

#### 4 「優しくなければ男じゃない。可愛げがなければ女じゃない」

日曜日。

私はゆっくりと目を開けて、同じくらいゆっくりと体を起こしてから、時計を見た。

とくに昼は過ぎていた。むしろ夕方になかった。

時間を把握したら、お腹が鳴った。

夕べは何も食べてないから、夜、朝、昼、と3食立て続けに取ってないんだから、無理もない。

だけど動くのがかたくなくて、私は再びベッドに横たわった。

当たり前だけど、すでにアリスは活動しているらしくて、ここにはいなかった。

むしろ、家にいる気配がない。加えて、珍しく琢也も出掛けているのか、隣の部屋からもリビングからも物音は聞こえない。

一人、か。

……久しぶりだ。

そういえば最近、一人で家にいることなんてなかったわね。

オヤジに話をしたあと、コンビニで働いて仕事を覚えて、それから店長になって……。

店長になるくらいにアリスと出会って、うちに住み着いて、んで琢也もだんだんと居つくようになって……。

大抵誰かがいた。

仕事から帰ったら、誰かいた。

起きたら、誰かいた。

だから、誰もいない、というのがこんなにも落ち着かないことだというのを忘れていた。

シーン、という音のない音が耳に入ってくるのが嫌で、布団を被った。

布団をかぶっても、シーンという音が染み込んで来る。

この音が嫌いだ。

シーンとか、キーンとかいうこの音は、一人であることを異様に強調する。

一人だ、一人ぼっちだ、お前は一人だ。

うるさい、だまれ、余計なお世話だ。

塞ごうと心の声を張り上げる一方で、小声ながらも、その理由を  
考える自分もいる。

なんで一人なんだろ。私が変わだから？ 嫌な奴だから？ 我俣で、

乱暴で、黒くて、暗くて、だけどそんな自分が嫌で、なんとか変え  
ようとしている割には変わらないから？ 普段はあんななのに、

一人になった途端に、こんな風になるから？ それが隠せなくて、  
滲み出てるから？

「……く、る」

立ち上がって、洗面所に向かう。

そして流しにへばりつくように佇む。

クルナ、バカ。サイキン、ナカツタノニ。

吐くまではいかない。でも吐けないせいで、強烈な吐き気はいつ  
までも消えない。

体の中から消えない感覚を消すために、バスルームに入って、シ  
ヤワーの蛇口をひねる。

服を着たまま水を浴びる。寝起きの冷えた体から、更に体温が奪  
われていく。

だけど、吐き気は消えない。

体が震え始める。

だけど、シャワーは止めない。

いや、止めたい。だけど、体が動かない。

動こうと思ってるのに動きたくなくて、考えようとしてるのに考  
えられない。

言葉がてんではらばらに組み合わさって、体にちゃんと命令が伝  
わらない。

手を上に止めて、シャワーの水を捻って、服を立ちあがって、髪を脱いで、ご飯を乾かして……

ン？

オカシイ？

ヘンカモ

ダケド、ナニガヘン？

エツト

ナンダツケ？

ナニシテタ？

ナニ、シテンノ、ワタシ？

わかんない

ワカンナイ

わかんないのかどうかワカンナイ

わかんないんだとしたら、ナニガわからなくて、なにがワカラナイカラ分らないと思ってるのか、というか私はなにを考えてて、あれ？

えっと

あー

もー

なんか……

どうでも……

「おい、こら、バカおぜうさま！」

意識が現実呼び戻された。

言葉がきちんと組み合わさって、意味のある文章になる。

「ああ……琢也だ」

それでもまだ全体としては、ぼんやりとしてる。もやのかかった意識と視界の中、琢也はシャワーを止めて、私の服を脱がせて、タオルで水分を拭き取ってから、ベッドに運んだ。

「どんだけ水遊びしてたんだお前は」

夏なのにエアコンを暖房にして、布団をかけて、部屋と私を暖めながら、クローゼットから着替えを引きずり出す。しかも、余所行きの高いやつばっか選んでる。クリーニング代にいくらかかると思ってるんだ。あんたの安いワイシャツと一緒に考えてるんじゃないでしょうね？

「最近ずつと調子悪そうだったから、危ないとは思ってたんだけど、案の定だもんなー」

何の話？

「休日だからって、息どころか、魂まで抜くなってるの、面白くないから。」

「ほら、とりあえず下着だけでも付けるぞ」

勝手にやるなバカ。

と思いつつも、体は動かない。口すらも動いてない。

琢也はそんな私に動じることもなく、慣れた手つきで私に下着をつけた。どうしてこんなことが出来るのか、元気な時なら、小一時間問い詰めるところだけど……

って、そうか、私、今、元気ないんだ。

自覚すると、なんでか笑えて来る。

元気が無いと分かった瞬間に笑いがこみ上げるとは、われながらひねくれてるっていうかなんていうか……一言で言うなら、頭おかしいんじゃないの？ だ。

このままじゃいけない。

おかしすぎる人間は、この社会じゃいきられない。

だから、まともにならないと。

ホンモノのワタシが、現実の私にならないといけない。

ワタシが感じるワタシでなく、誰かが定める私にならないといけない。

……アリス。

アリスは？

そう、アリス。

アリスがいないと落ち着かない。

私は知っている。

私が、心のどこかでアリスを支えにしていることを。

それも、普通の人間が思うようなキレイな繋がりなんかではなく、  
だ。

愛情。

友情。

信頼。

絆。

そのどれもが当てはまるようで、そのどれもが当てはまらない、  
もつと特異な気持ち。

……親子に近いのかもしれない。

それも、息子から卒業できない母親みたいな。  
あの子を守っている気になって、私は落ち着く。

心の奥から保護欲をかきたてるあの子がいて、その保護欲をアリスに注ぐことで、私は私を支えている。

何かの役に立っている。

誰かの役に立っている。

そこにいるだけで、不思議と誰かを救ってしまうような人間であるアリス。そのアリスを私は支えられる。それは間接的に、私が多くの人間を救っているように思える。

そんなことをいえば、アリスはきつと全力で否定してくれる。

私もそれが全てだとは思えない。

だけど、まったく無いともいいきれない。

いや……。

いい。

どうでもいい。

とにかくアリスだ。

アリスはどこ？

教えなさいよ、そのエロマンガ家。こんな時に役に立たないで、いつ私の役に立って言うのよ。

「……アリ、スは？」

「んー？ ちょっとやることあって出掛けてるよ」

「……無職のくせに？」

「無職でもやることはいろいろあるんだよ」

おでこを軽く叩く琢也に対して、何も反応できない自分がひどく惨めに思えてくる。

「売れない、エロマンガ家は？」

「お前、よくその状態でそついう発言できるな」

どうだ、凄いだらう。

あんたがこの呼ばれ方をするのが嫌いなのは、とっくに知ってるのよ、ぞまーみる。

「オレが何してたかは、起きれば分かる。だからさっさと冬眠から目覚めろ」

琢也はそういうと、動けない私を置いて、キッチンに向かった。扉は開けっ放し。だから、音が聞こえてくる。

シーンでも、キーンでもない。コポコポとか、カチャカチャとか、人がいる音がする。

その音に温められるように、ゆっくりと体と意識が感覚を取り戻していく。

そして、それから10分くらいしてから、私はようやく起き上がり、薄手の毛布を巻いて部屋を出て、

「えい」

琢也の背中を思い切りつねった。

「いったあ!？」

「やーい、ひつかつかたー」

「何にだよ!！」

「さあ？」

首をかしげながらイスに座ると、温かいコーヒーが出された。すでにミルクも砂糖も入っている。ブラックがいいのに、という顔をすると、胃に悪いから、と反論をされた。仕方ないから我慢して飲む。

「そろそろ落ち着いたか？」

「……ん、いちおう。ごめんね」

「ここは素直に謝っておく。」

あーなってる時はそんな意識はないけど、普通の状態に戻ると、大迷惑をかけていたという自覚はある。しかも黒い部分が全快で出たりするから、普段ならセーブするようなことも平気で口にする。まあ琢也の耐久力があればさつき程度ならどうってことないと思うが、何にしる後味は悪い。

「いや、オレこそちよっとのつもりで外に出たのがよくなかったな」  
「その通りよ、反省しなさい」

「冗談いえるようになったら、まずまず、か」  
まだ黒さが残っているのか、微妙な返答をする私だったが、琢也に怒った風はない。

心が広いというより、私の酷い時を知ってるからだろう。中学から高校あたりが一番酷かったけど、一緒に暮らすようになってからも、何度かこの発作というか、発狂というか、鬱病っていうか……なんといつていいのかわからないけど、妙な状態に陥ることがあった。

よく、ストレスとかが原因でものを壊したりとかする話しがあるでしょ？

あれが、自分の内側に向かったようなもの。自分で自分の神経を攻撃するから、物事がよく分からなくなつて、何もしくなくなるらしい。途中までやってたことをそのままほつたらかしたりするから、さつきみたいに水浴びたままになつてたり、火が燃えたままだったり、転んで流血したままだったり、むしろ体が呼吸の仕方を忘れたりとか……そんな感じ。

で、それを超えても暫くまっくろくろすけがうじゃーって出てる状態に陥る。

よく考えると、恋人ができて長く続かない原因の一番はこれかも。そりゃ付き合ってる相手にボロクソに言われれば、愛情もなくなるってもんよね。女なら大抵は泣くし、男もプライド傷つけられて憤慨するだけだものね。

どこかに笑って流したり、それをばねに成長するような男いないかしらね？ 女でも可。っていうか、そんなできた人間が私の恋人になつたりはしないか。

「で、アリスはどこ？」

「さつきも言ったけど、やることがあつて出かけてるよ」

「あんたはどこ行ってたの？」

「ちよつとお使いにな」

といつて、見慣れないキーをポケットから取り出す琢也。家の鍵

ではない。というかよく見たらそれは、車の鍵のようだ。だが、琢也がマイカーなんてものを持っているはずが無い。

「車の鍵なんてどうしたの？ 路上にあるのは捨ててあるわけじゃないのよ？」

「人を泥棒扱いするな。友人から借りてきたんだよ」

「なんでよ？ 地球温暖化に拍車がかかるから歩きなさいよ」

「デートに行くのに歩きじゃサマにならないだろ？」

「相手は誰？ 誘拐した中学生？ 知ってるだろうけど、合意の上でも16歳以下は犯罪よ？」

「児童ポルノ法ならオレの方が詳しいぞ」

「嫌な自慢ね」

「ごもつとも」

そして互いにコーヒーを飲む。

「つて、ちげーよ。それで話を終わらすなよ」

「あんたが勝手に終わったんでしようが」

「あー、あー、悪かった悪かった。とにかくデートの相手は香織、香織おぜうさまだよ」

少し、耳を疑う。

『カオリオゼウサマ』がデートの相手ということは……

「あんたの周りには、香織って言う名前のお嬢様が多いの？」

「幸か不幸か、目の前にいる相手だけだな」

「てことはやっぱり、デートの相手に私を指名しているということね。」

「なんで私があんたなんかとデートしないといけないのよ」

「どうせ暇だろう？」

「私より暇なやつに言われたくないわよ」

という私のもつともなセリフなんて聞かずに、琢也は自分の部屋に入って、着替えを始め出した。

私は絶対に行くもんか、とカップのコーヒーをすする。

行かない理由は特にない。ただ、こいつとデートというのは、ど

うにもむず痒い気になるのが、理由といえば理由だ。

こいつが転がり込んでからだいぶ経ったけど、2人でデート……いや、デートどころか、買い物だつてろくに行つたためしがない。私は日曜日以外は毎日仕事がある。日曜日はオヤジの会社から派遣される副店長みたいなのが来てるから休みなんだけど、その休みだつて、大抵はアリスと一緒にどこか行くか、だらだらと過ごすかの二択だ。

私にとって琢也は、いればいた方が便利だけど、いないならいいで、まあなんとかなるか、みたいな存在だと認識している。けれど、一緒にどこかに行きたいと思つたり、ディナーを楽しみたいと思えるようなタイプじゃない。私の趣味でいえば、男は最低でも30を超えないと話にならない。頼り甲斐とか、渋さとか、落ちつきとか、そういつたものがないのであれば、可愛い女の子の方が、はるかに好みだ。

「だ、か、ら、行かない」

「心の中で行きたくない理由を語るな。俺はエスパーか？」

心の中で語つてると当てただけでも、充分エスパーよ。

「とにかく、行かないつたら、行かない。今日はだらだらするの。」

明日からまた仕事あるんだから、アリスセラピーで癒えるの」

「効果があるんだか、ないんだか微妙なネーミングだな」

という返答と共に、琢也が部屋から出て来る。

「ほら、コーヒー飲んだらさつさと着替えろ」

口調もノリもいつもと変わらない。

「とりあえず食事に行くからな。もう予約はとつてある。つってもそんな気兼ねするような店じゃないけどな」

なのに、私は思わず……その、なんていうか、自分の目を疑つた。こいつは本当に、あの琢也なの？

「……あんた琢也よね？」

「水の浴びすぎで頭おかしくなつたか？」

琢也だ。間違いない。

「……あー、そうか。そういえば、お前の前でまともな格好したことなかったな」

そういうと、琢也は一輪挿しに刺してあった花を適当な長さに折り、私の髪にカンザシを刺すように飾った。普段なら、何をキザなことしてるんだバカ！ となるはずなんだけど、今は違う。

似合う。ピシっとしたスーツと、ハリのあるシャツとネクタイ。普段は伸びっぱなしのヒゲも丁寧に剃ってるし、髪型も整えている。全体的に落ちついてるのに、きちんと若さも感じる。ホストほど嫌味つたらしくなくて、でも会社員のような日常感は漂わない、理想的なセンスと空気。

「お前の趣味に合わせると、こーいうのだろ？」

言葉が出ない。悔しいけど、確かに私の趣味だ。

「……これで、顔がジャニーズに変わったら合格」

「残念だが、俺はアンチジャニーズだ」

「じゃあ、せめてハリウッドスター」

「洋画かぶれに、日本の俳優のワビサビはわからねーだろうな」

あれこれいつているが、こうしてみると、別に悪い顔立ちではない。確かに最近の流行とは違うだろうが、日本人らしいといえはらしい顔つきだし……と思うけど、でもむかついたので、本当のことはいつてやらない。

が、そんなことすら見抜いているのか、琢也は人の悪い笑い声を上げながら、イスに座った。

そして私の目を真っ直ぐに見ながら口上を述べる。

「宜しければ、私めにあなたのエスコートをさせて頂けませんでしょうか、ミス香織」

今時、映画でもマンガでも使わなそうなのその気持ち悪い誘いに私は……

「特別に受けてあげるわ」

……不覚にも頷いてしまった。

が、本当の不覚はこの後だった。というか、不覚の連続だった。デートの最中、不覚しっぱなしだった。

自家用車も持ってなくせに運転はスマートだし、連れていかれたレストランは、内装も料理も文句ないし、途中で立ち寄った雑貨屋は、小さい割には良いものばかり置いてあるし、私が散々目移りして選んだ小物を買って車に戻ると、一足先に戻っていた琢也が車の中に花束とプレゼントを用意してるし……

で、今こうして酒を飲んでるバーだって、置いてある銘柄も、雰囲気も、とにかく私の好きなものばかり。今まで少なからず男にエスコートされたデートをしたことあったけど、ここまで私の好みに合わせたプランを作ってきた男はいなかった。

正直、嬉しいし楽しい。

でも相手が……このプランを立てて、しかもほぼ完璧にこなしてるのが琢也だと思うと、じわじわと怒りにも似た悔しさが湧き上がってくる。

「なんであなたみたいに、ずっと家に籠ってる男が、こんない店知ってるのよ」

「最近のマンガ家は、画力だけじゃー、やってけないんだよ、おせうさま」

「あんたいっそ、マンガ家なんて辞めてホストになりなさいよ」  
「嫌なこつた」

その澄ました顔がむかついたので、テーブルの下で足を踏みつけてやると、いつもの琢也らしい顔に戻った。輝きもりりしさも抜けて、家庭臭がしみついた主婦と、いつまでも家から出て行かない息子みたいなオーラが戻る。

「やっぱあんたは、そっちの方が落ちつくわ」

「人が一生懸命、演じてやってるのに」

「もう十分よ。ありがと」

いろいろと文句も言ったし、攻撃も加えたが、こいつが私のためにいろいろしてくれたことは間違いないし、ありがたいと思う。ただ、いつまでもそんな着飾った状態で目の前にいられるのも、それはそれで嫌なのよね。

琢也の方もそれを察してくれたのか、整えていた髪を乱暴に崩して、きつちり締めていたネクタイを緩めて、首もとのボタンを開放した。

「1度解いたら、もう元には戻れないからな」

「ラスボスの変身後みたいね」

琢也のグラスに自分のグラスを軽くぶつけて、互いに口に運ぶ。

「もう夜、か」

店内の時計は、夜どころか、そろそろ日付変更へと近づいてきている。

「今日はいいい気分転換になったわ。ありがとう」

「ま、そういつて貰えたなら、ちよつとは頑張ったかいがあったってもんだ」

「まさか、あんたがこんなことしてくれるなんて思わなかったわ」

「目に見えて弱ってたからな」

「私が？」

「自覚はあるんだろう？」

その質問にはつきりと答える代わりに、苦笑いを浮かべて返事にする。

「ま、オレとしては、弱ってなよなよしてる方が可愛げがあって好きなんだが」

「じゃあ早いとこ立ち直るわ。あんたに惚れられても迷惑だから」

「そうしてくれ。オレもお前に惚れるのは避けたい。それに、いつものお前じゃないと、どうにも落ちつかないちびっこがいるからな」  
アリス、ね。

今、こうして落ちついたから思えることだけど、確かにあの子にはかなり心配をかけてたと思う。心配だけならまだしも、嫌な思い

をさせたかもしれない。

お風呂の誘いをつっけんどんに断ったり、関係無い愚痴や、苛立ちをぶついたりしたかもしれない。

アリスは、忘れ易い代わりに傷つき易い。回復は早いけど、防御力は限りなく低い。

あのバカに関する一連のことで、だいぶ傷付けてしまったのは、間違い無いだろう。

「……この時間でも空いてるケーキ屋って知ってる？」

「そう思うと思って、このパティシエめが用意いたしましたよ、おぜうさま」

琢也が鞆から取り出したのは、こいつお手製のカップケーキ。ちゃんと包装までしてある。しかも、クマの絵柄がついたラブリーナやつ。

「もう少ししたらアリスの用事も終わるだろうから、迎えに行くぞ」

「その用事ってなんなの？ その口ぶりだと知ってるみたいだけど」

「な、い、しょ」

「キモイ」

間髪いれずにストレートに攻撃したのに、琢也は心臓に毛が生えているのか、微塵もダメージを受けてくれなかった。やはりこいつには精神攻撃よりも物理攻撃ね。蹴りは今やったし、つねりもやったから、あとはビンタがババチョップあたりだろうか。

「じゃ、行くか」

私の攻撃の気配を読んだのか、それともたまたまか、とにかく琢也は立ち上がると、支払いを済ませて店を出た。私も少し遅れて店を出る。

そういえば、今日の支払いは全部こいつがしてるんだけど、どこからその資金が出てるのかしらね？

今だかつてこいつから生活費とか家賃の類を預かったことは無いんだけど……って、逆に私も食費とか渡したことなかったわね。当然アリスに収入があるわけないから、こいつが自腹で材料費とか払

ってるんでしょうけど……。

「ねえ、エロマンガ家って儲かるの？」

「いいや、ぜんぜん」

「なら、あんたどっから資金調達してるのよ」

琢也の口がぴたりと閉じた。それでもしつこく尋ねると、琢也は恐ろしく真剣な顔で一言述べた。

「キクナ」

泣きそうと言うか、叫び出しそうと言うか、とにかくいい話しないでいいことは確かなようだ。普段なら根掘り葉掘り聞くところなんだけど……今日は大目に見てあげることにする。

私が追求しないことに安堵した琢也は、良く考えれば飲酒運転にも関わらず、相変わらずなハンドルさばきで夜道を進んで行く。やがて私のマンションが近づいてきて……そしてその前を素通りした。

「あんた、どこいくつもり？」

「ホテルっていったら？」

「ここから先は、オプション料金がかかります」

「お前はどこのホテルだ！」

呼んだことがあるのか、あんたは。

「まあ、冗談として、もう少しだけ付き合えよ」

「明日も仕事あるんだから、ちょっとだけよ」

「分かってるよ」

そういって、琢也は2分ほど車を走らせて、ローカル線の駅近くのパーキングに車を止めた。そして、真っ黒な手ぬぐいのような布を取り出して、私に言った。

「これで目を隠せ」

「あんたにそんな趣味があると思わなかったわ」

「あるけど、今はオレの趣味を披露する時間じゃねーよ」

「あるんだ」

「そこを拾うな」

「で、趣味でないなら、なんなのよ？」

「行けば分かる。行けば分かるさ」

どっかで聞いたことあるようなフレーズをはきながら、手馴れた様子で私に目隠しをする琢也。まあもう少しくらいなら、このデートごっこに付き合っただけでもいいだろうと思って抵抗しなかったんだけど……こいつが普段アリスにどんないけない遊びを教えているのか、明日以降、じっくり聞いてやらないといけない気がしてきた。

「ふふ、みんながお前のこと見てるぜ」

「納豆を喉に詰まらせて死になさい」

「嫌な死因だな」

琢也の手に引かれる形で、どんだけ歩いただろうか？

私は妙にざわざわしている、人が密集してできる音を聞き取った。

……まさか、本当にヤバイ集会にでも連れてこられたのかしら？

もしそうなら、非人道的手段をとつても逃げ出してやる。

そう覚悟を決めて、足に力をいれたところで、目隠しが外された。薄暗い明りですら強く感じるほどに暗闇に慣れていた目が、ゆっくりと馴染んでいく。

そして、私は見た。

視界一面に広がる……花畑を。

「……え？」

思わず言葉がなくなった。

桜、梅、イチヨウ、すずらん、コスモス、ハイビスカス、ヒマワリ、ユキワリソウ、ダリア、タンポポ……季節も土地も無視した色とりどりの花が、所狭しと生えている。それぞれの花は、互いに主張しながら、でも相手を尊重しあうように、乱雑に、でも整然と咲き乱れている。

夜明かりと街灯を受けた花畑。そこには、照りつけるような激しさはない。だけど、全てを飲みこんで、全てを許してくれるような温もりを感じる。

これはなに？

夢？

それとも実は、シャワーの水で死んでしまった私が、あの世に辿り着いて見ている景色？

……ううん、違う。

これは現実だ。

間違いなく、現実の風景だ。

昔、似たような景色を見たことがある。

今日のように、わけがわからなくなって、吐き続けて、胃の中が空っぽになって辿り着いた先で、同じような花畑を見た。その花畑は、街の片隅に陣取って、街行く人の足を次々に引きとめ、幻のよう不安定なくせに、言いようのない存在感を放っていた。

目の前の花畑と同じように。

そして、こんな花畑を作れる人間を、私は1人だけ知っている。

「……アリス」

壁に向かっていたアリスが、こつちを振り向いて、にっこり笑う。  
「もうちょっとで完成だから、待っててね」

そしてアリスは、再び壁に向かう。手に、安物の絵の具を乗つけたパレットを持ち、足元にはやっぱり安物のカラーズプレーヤ、クレヨン、油絵の具なんか転がってる。

そして、踏み台に乗って、小さな手で花畑を作っていく。近所のがキどもが適当に落書きをしては、不愉快な思いを道行く人間に与えていただけの壁が、花畑になっていく。

「アリスのやることって、これだったの？」

「そ、朝から絵の具とか買いにいったって、ずっとこれと格闘」

それでこの人垣……。

みれば、本当ならこれを止めないといけない警官までもが、アリスの作る花畑を興味深そうに見守っていた。

「……ん、これで完成！」

アリスが踏み台からぴょんと降りると、拍手が起きた。誰も喋らない。ただ、その花畑に足を踏み入れたように呆けながら、拍手だ

けが夜の空に飲まれていく。

その拍手に興味を覚えたのか、酔っ払いがやってきた。カップルがやってきた。弾き語りがやってきた。不良がやってきた。次々に人がやってきては、その拍手に加わった。拍手は花畑を飛ぶ蝶の羽音や、木々のざわめき、風の走る音のように聞こえる。

……人の音だ。

拍手のリズムが、だんだん心臓の音に聞こえてきた。

別々の心臓を持った、バラバラの人間が、まるで同じ塊になったように、心臓の音を合わせる。

そのきっかけは、この花畑。

花畑の絵が書かれた壁。

その壁に絵を書いたのは、小さな同居人。

絵を書く以外にたいした興味はなく、しかもその絵をどうこうしようということにも興味の無い人間。

あなたは知ってるの？

大勢の人間が、あんなのようになりたくて地べたをはいずりまわってるのよ？

大勢の人間が、あんなのようになやつに出会いたくて、空を飛び回ってるのよ？

なににあんたは、私の部屋なんていう狭いところに住み着いて、たまに外に出ては、行きずりの人間に触れるだけで、また部屋に戻ってしまう。

『世界にいつてみたいとか思わないの？』

アリスは答えた。

『プロになってみたいとか思わないの？』

アリスは答えた。

『大勢に自分の絵を見てもらいたいって思わないの？』

アリスは答えた。

私とその手の質問をするたびに、アリスは同じような答えをいつも口にした。

アリスは答えた。

『それより、香織ちゃんと一緒にいたいから』

そう、アリスは答えた。

昔のことを少しだけ振り返っている間も、拍手は止まってなかった。アリスは四方八方から押し寄せ、賞賛や質問を投げってくる人間を掻き分けて、こっちへとやってきた。

「お待たせ」

アリスの顔に、黄色や白がくっついていてる。

「ね、こっちきて、こっち」

そして赤や青がくっついた手で私の手を取って、再び人ごみを分けながら、壁に近づく。

壁は、シンナーや絵の具の匂いしかしないのに、でもやっぱり花畑に見えてしまう。

「ここ。ね、ここ」

花畑に魅入っていた私の手をぐいぐい引っ張って、花畑の一角に私の視線を持っていく。

そこには、一軒の建物があった。周りは全て花ばかりなのに、ここだけどうして建物があるんだろう？

「名前、かいて」

アリスが私に筆を握らせる。

「名前って、なんの？」

「お店の」

ああ……そういうことが……

改めて花畑を見る。

咲き誇る花畑の一角にある建物は、お店。

良く見ればそこには、絵が飾ってあり、カフェを楽しんでる人がいて、そしてアクセサリーを眺めている人がいる。

これは、私のお店なんだ。

私の、ギャラリーカフェショップなんだ。

いつか、私が掴もうとしている夢なんだ。

「……香織ちゃん」

アリスが笑ってる。

「忘れちゃだめだよ？」

そう、ね。

「負けちゃだめだよ？」

そう、ね。

「約束。ね？」

ええ……約束、ね。

「ほーれ、さっさと書け、おぜう様。明日も仕事なんだから？」

「うっさいわね、言われなくても書くわよ」

「お店の名前、決まってるの？」

「考えてなかったんだけど……今、決めたわ」

そして私はペンを握り……自分でもおかしいんじゃないかってくらいに強く握り締めながら、名前を看板に書きこんだ。

それを見て、アリスがくすぐったそうに笑う。タクヤも、珍しく照れたようにそっぽを向いた。

「お前、よくそういうくさいの書けるな」

「えー、ステキだよ」

「そうよ。なにせこれは夢だもの。少しくらい臭くてちよつどいいのよ」

琢也がやれやれとばかりに、アリスが散らかした道具の片付けを始めた。

私はそれを見ながら、書き終わって疲れが一気に出たのか、ふらついたアリスを抱きとめて、人垣をわけて先に車に戻った。暫くして、タクヤも片付けをおえて車に戻って来る。

「相変わらずアリスはお前にべつたりだな」

アリスが私の手を握って寝ている姿を見て琢也は苦笑する。

「羨ましい？」

「お前がない間に堪能してるからそうでもない」

私は運転席を蹴り飛ばしてやった。ダメージはないが、これで傷でも付いたら、弁償するのは琢哉だ。精神的、財政的ダメージは十分与えられる。琢哉も私の目的が分かったのか、態度を改めると、頼むからやめてくれと泣きついてきた。

「分かればいいのよ、わかれば。ほら、さっさと車だしなさいよ。

明日も仕事だつていったでしょ」

「つたく、なんでお前みたいなやつがいいんだ、このちびっこは」

「そんなん決まってるでしょ」

私はアリスのほっぺたをつまみながらいった。

「この子の趣味がおかしいからよ」

琢哉は笑った。

「変人は変人同士気が合うわけだな」

「よかったわね、今回は仲間はずれにならなくて」

「お前、変人同盟にオレも加えやがったな」

「自覚無いの？」

「無いな」

「なら、気が合わない相手と暮らす気なんてないから出て行きなさい」

「うそある。ないなんてこないあるあるよ」

「どこの大陸の人よ！ っていうか、あるのなのかよくわかんないじゃないの！」

そして私たち変人同盟は、3人揃って、いつものあの部屋に帰っていった。

エピローグ 「この道をずっと行けば、夢に続いてる気がする」

「私を雇ってください！」

そういきなり申し出てきたのは、先日、万引きで捕まえた高校生の中で唯一の女の子だった。

私はその発言の意図がまるで読めず面食らっていたが、少女の隣にいた男性……というかおっちゃんが、少女の頭をがしつと掴んでドザつと下に押し下げながら、補足してくれた。なんでもこのおっちゃん、女の子のお父さんらしい。で、私が連絡した時は不在だったのだけど、後から娘と妻から話しを聞いて、慌てて詫びに来たというわけである。

「なんでもします！ 給料もいりません！ 罪滅ぼしをさせてください！」

いくら昼前でお客が少ないとはいえ、真昼間の店内でそんなバカみたいに騒がれても困る。とにかく落ちついて、と語りかけながら、バツクルームに誘導して更に詳しい話しを聞く。というか、勝手に喋られる。

「お父さんと話したんです。何か御詫びしないといけないって。でもお金でってというのは汚いし、商品を買うのも違うし、なら迷惑掛けた分、働いて返そうって」

「あの、でも、でもすね？」

「お気持ちはわかります！ 万引きした人間を雇うなんてできない！ だけど1度だけ。1度だけこいつにチャンスをやってください！ この通りです！」

土下座する父。

「お願いします！」

それに倣って土下座する娘。

そして何か何かと視線を集中させるパートのおばちゃんたち。

まるで私が悪い人みたいじゃない！

「いえ、あの、でも、だからですね？」

何を言おうと頭を上げない父娘。

何か発言しようとするれば、お願ひします！　って封印される。

RPGで、村人のお願いに「うん」って答えないと先に進めない無限ループに陥った気分よ。

「だから、こちらはもう気にしていないので」

「なんと心の広い！　ですが、そんな店長さんの元でしかしたとあつては、尚更です！」

どうしろっていうのよ！？

なんで土下座している人間の方が話のイニシアチブもってんのよ！？

と、私がだんだんイライラし始めた時、パートの町田さんがやってきた。やった。私を支えてくれてる町田さんのことだ。きつとこの無限ループに陥った私に助け舟を出すべく、やってきてくれたに違いない。そう、さすが町田さん。お客が来るとか、仕事が終らないのですがとかいってくれば、このおっちゃんたちも自分たちが迷惑をかけていることに気づくに違いない！

「あの、店長」

「はい、なんででしょう？」

「雇ってあげたらどうですか？」

この一言が、決定打だった。

裏切られた気分いっぱい私の気持ちなんて無視して、父娘は町田さんの手をとって号泣。

それを見ていたパートのおばちゃんたち……　っていうか、客で来ていた近所のおばちゃんおっちゃん、おばあちゃんたちは、まるで大岡裁きを下した大奉行みたいな感じで私のことを褒め始めた。しかも拝むし。これじゃあ、奉行どころか菩薩まで昇華しているかもしれない。

「がんばるんだよ、お嬢ちゃん！」

「あたしゃ、応援するからね！」

「はい、ありがとうございます！ 優しくてかつこいい店長さんに報いるためにも、一生懸命働きます！」

あー、日本人って相変わらずこういう話に弱かったのね、とかもうほとんど投げやりになった私の目の前で、次々と話は進んでしまっただ。

履歴書はすでにもってきてるし、町田さんが従業員の登録用紙は出しちゃうし、もう今からダメっていつても、誰も聞きはしないでしょうね。

「よろしくお願いします、か……香織さん！」

「あー、はい、よろしくねえ」

こうして、なぜか私を見て顔を赤くする少女はうちの店で働くことになった。さすがに給料ナシってのは法律的にもいろいろあるので、とりあえずは研修期間ってことで、自給を若干下げてスタート。そして学校を休んでやってきたというその日から働いてもらって、ちやうど今日で一週間になるんだけど……

「で、それがどうしたんだ？」

琢也がチキンライスをタマゴで包みながら、続きを促す。

「それが彼女、優秀なのよ」

正直驚きだった。とにかく、仕事を覚えるのが早い。入って一週間、だいたいの仕事はこなせるようになった。小林君と同じ学校なんだから元々できがいいのだろうけど、それにしただって早いし、しかも丁寧だ。父親が大工。母親が建築士っていう血を余すことなく受け継いでいるとしか思えない。

しかも彼女、根は明るい子らしく、お客さんとも普通に話せるタイプだった。この手のタイプは貴重だ。フレンドリーな店員がいると、親しみを覚えたお客が増えるだけでなく、それが予約客に変化する可能性がある。例えば季節の商品予約……クリスマスケーキとかの予約に繋がったりもするってこと。結果、当然のことながら売上があがる。

「で、その子に触発されたのか、別の男の子も1人入ってきてね」

その子も万引きしていたうちの1人だ。確か、女の子を支えるように抱いていた子だったと思う。なんとなくだが、この2人は付き合っているのではないかと思って小林君にさぐりをいれたら、案の定そうだった。

それを聞いた時、しまったー、と思った。いやね、この年頃のカップルが二人してコンビニでバイトなんかすると、仕事からだっというのに、いちやいちやしたりするのよ。だから警戒してたんだけど、それは無かった。どうやら気弱だけど、真面目なタイプの子らしく、万引きも脅されてやっている節が見えた。

ちなみに、顔も悪くなかった。無骨な感じだけど、どことなくストイックな、職人系のオーラを感じる渋さがある。きっと将来は、いいおっさんになる。そういう潜在的な何かを持っていた。

「なんかこうして考えると、万引きされてたぶんのお金は返ってき  
たし、優秀な店員が2人も増えて、結果として得したのかしら、  
っ  
て」

「ま、苦しい思いもしたんだから、どっこいどっこいじゃないか？」

「雨降って地固まるってやつ？」

「それより、人生万事塞翁が馬、だろ」

「言いながら琢也は、三つのオムライスをテーブルに並べた。

「ンジャ、アリスを起こしてきますか」

「ご飯できた!？」

「タイミングいいわね」

琢也が起こすまでもなく、自ら起きてきたアリスはイスに座って、  
スプーンを握った。

私と琢哉はそれを見て笑いながら、自分のスプーンを握って、3  
人でオムライスを食べ始める。

「むう。今日の出来は、いまいちだな」

自称この家のメイドさんにして、エロマンガ家の琢哉。

「そんなことないよ、おいしいよおー!」

無職にして、この家のマスコットであるアリス。

「ま、70点つてところじゃない？」  
稼ぎ頭にして、この家の主、私。

それぞれ、見ているものは違う。  
向かおうとしている場所も違う。  
境遇も、生き方も、考え方も違う。

いろんなことが違う私たちは、いろんなことが違うのに、何故か  
こうして同じ家で暮らしている。

でもまあ、きっとそれでいいのよ。

いろんなことが違う私たちだけど、一つ、確実に同じことがある  
のだから。

それは私たちが、世間から見れば『ジャンク』であるということ。  
つまり私たちは、

ジャンク（壊れた）な、

ジャンクシヨン（関係）の、

ジャンキー（中毒者）なのよ。

だから、このお話の名前は『ジャンク・ジャンクシヨン・ジャン  
キー』ってわけ。

「「「「ちそつちまでした！！」「」

さつとと……疲れたから今日はおしまい。

ま、気が向いたら、また別の話でもしてあげるわ。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4186c/>

---

ジャンク・ジャンクション・ジャンキー

2010年10月8日12時46分発行